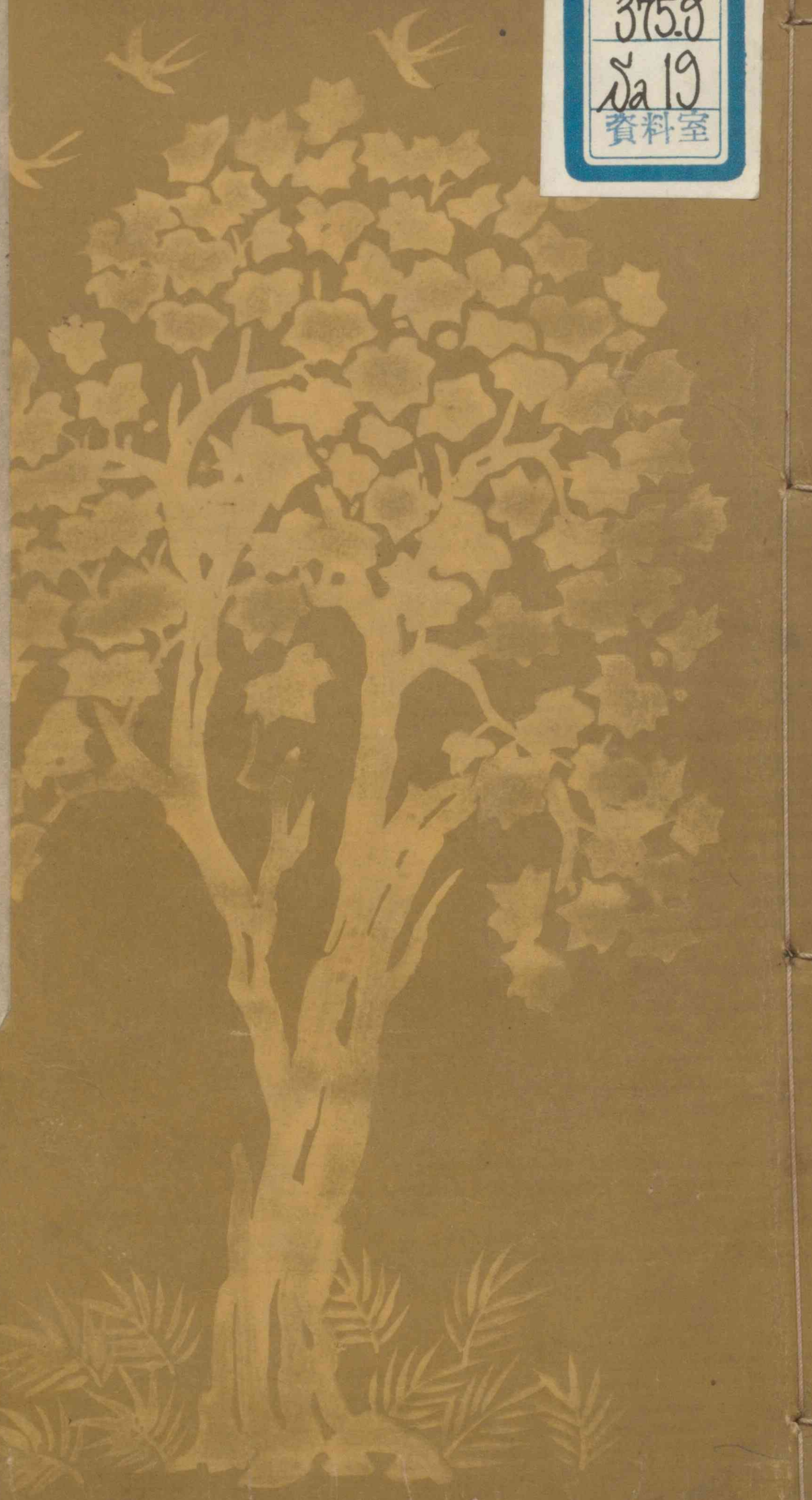
最新國文讀本

巻六



375.9
Sa 19
資料室

41688
教科書文庫
4
810
41-1933
200030
1603

文部省檢定濟

昭和八年十二月二十七日・中學校國語漢文科用

昭和九年一月二十九日・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

最新國文讀本

湯川弘文社

資料室
375.9
Sa19

南風　和田三造筆

廣島大學圖書之印
廣島大学 教 33928

最新國文讀本　卷六

目次

○一　明治天皇の御製　一
二　日本精神と闇齋先生　平泉澄　一〇
○三　最後の參內　（太平記）　一八
四　四方の海　二四
五　美術の鑑賞　二六
○六　仁和寺の法師　（徒然草）　三三

七　狂歌と川柳　〔[illegible]〕　三七
八　民謠　島木赤彦　四四
九　ちやるめら　新村出　五三
一〇　俊寛　菊池寛　六〇
一一　有王島下り　〔平家物語〕　七〇
一二　笛を合はす人　室生犀星　八二
一三　空ゆく雁　〔曾我物語〕　八九
一四　膏藥煉　〔續狂言記〕　九三
一五　傳説　金田一京助　一〇一
一六　木曾殿の最期　〔平家物語〕　一〇八

一七　鉢の木　〔謠曲〕　一一六
一八　苦言　和辻哲郎　一三三
一九　早春の賦　阿部次郎　一四〇
二〇　千曲川旅情の歌　島崎藤村　一四四
二一　月雪花　芳賀矢一　一四六
二二　輕信と妄信　澤柳政太郎　一五四
〔自修文〕
一　正成教訓　直木三十五　一五七
二　東海道の歌　一六七
三　壁畫の盛衰　瀧精一　一七四

附錄
主要宛字表
通用字表・類字表

最新國文讀本　巻六

一　明治天皇の御製

新しき日本帝國の建設者にまし〳〵、古今東西に比ひまれなる聖帝におはせしわが明治天皇が、同時にまた、わが國風なる和歌の道に御志深く、かつ御堪能にあらせられ、吾等國民が精神上の不朽の教、永久の糧たるべき幾多の作品を遺させ給へるは、いとも畏く貴き極みなり。

天皇の御治世は、前後を通じて、わが日本帝國の歴史上、最も多事の時代と稱しまつるべきものなりき。而してまづ内は徳川幕府

堪能　物事に深く達してゐること。

國步

嚴恭　緝熙　シフキ。

の瓦解、外は外國との交渉の發生等、所謂國步艱難を極めたる間に、新日本の建設てふ未曾有の大事業を行はせ給ひ、憲法發布、日英同盟、二十七八年・三十七八年の二大戰役、韓國併合等、國家の大事件に當らせ給ひ、わが國をして今日見るがごとき國家的地位たらしめ給へる御功績と、畏くも終始御身を以て國家とせさせられ、ひたすらに精勵國事に盡させ給ひ、御生涯を通じて變らせ給ふことおはせざりし御德とは、日月と共に千世萬世に輝き渡りぬべし。

明治天皇

天皇はかゝる嚴恭緝熙を極めさせ給へる御日常の間にも、ゆたかに大いなる御心よりして、常に御思を言の葉の道に寄せさせ給ひ、幾多のすぐれたる御製を遺させ給ひて、帝王の詩人てふ御名を、遠く異國の國民の間にも傳へさせ給へり。天皇の御製は、その數に於て古今の歌人の中に比ひなくおはしますのみならず、御秀逸に富ませ給へることも亦比ひなくおはしましき。由來和歌は、わが國の歷史と共に起り、歷史に伴なひて榮え、隨つて、和歌と皇室は最も關係深く、御歷代の天皇中、九十餘代の天皇の御製は歷史または歌集に遺り、また御集の傳はれるものも少からず。これら御歷代の天皇に竝べ奉りても、明治天皇は明かに歌人として卓絕の地位に居させ給へり。

卓絕

天皇は歌に就いて、所謂まごころを重んぜられ、そを歌の生命とせさせ給ひしことは、すなはち次の御製によりても伺ひ知り奉る

うちつけ　そのまゝ。
やがて　卽ち、とりもなほさずの義。

ことを得べし。

思ふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける

まごころを歌ひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

歌に對してかくの如き御考を抱かせ給ひて、思ふことをうちつけにのべ給ひ、まごころを歌ひあげ給へる天皇の御製は、まことに貴むべく仰ぐべき眞情流露の大御歌に富ませ給へり。しかして御製中の多きを占むる敍景の御作に於ても、

◎あしひきの山の端いづる月かげに大うなばらの波を見るかな

家なしとおもふかたにも燈火のかげ見えそめて日は暮れにけり

つかさ人云々　つかさ人は官吏のこと。そのさゝぐる書とは政務に關する書類をいふ。
草雲雀　昆蟲類中の直翅類に屬す。夏秋の頃黄昏より美聲をあげて鳴く。
おぼす　おもほすの約にして、思ふの敬語。

の如き、自然眞率のうちに自ら感情の豊かなるをおぼゆる御傾向著しく拜せらるゝあれば、更にまた、

つかさ人さゝぐる書もよみはてゝゆふべ靜かに花を見るかな

◎草雲雀鳴きもぞやむと秋の夜の月なきまどもさゝれざりけり

の如き、卽興卽感の作風にもすぐれさせ給へり。

更に又、最も吾等の感じ奉るは、畏き大御心よりして、或は國家をおぼし、或は祖神を敬ひ、或は國民をいつくしみ給ひ、或は御修養、はた御訓誡の意を詠じ給へりし御製なり。由來此の種の歌は、或は說明に流れ、或は理路に落ち、歌として趣乏しきもの多かるが習な

うたげ

れど、御製に至りては、高き調べと雅びやかなる趣とをうたはせ給ひて、その御意深し。これ天皇の高く大いなる大御心の發露にましゝが故と拜察し奉るところなり。この種の幾多の御製は、吾等國民の心に大いなる教訓として不朽なるべきこと、恰もかの古經典の一言一句にも比し奉るべきものといふべし。

曉のねざめしづかにおもふかなわがまつりごといかゞあらむと

あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

四方の海皆はらからとおもふ世になど波風の立ちさわぐらむ

●ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげを開きてしがな

いくさのには 戰場。

この種に數へまつるべき御製いと多かり。

子らは皆いくさのにはに出で果てゝ翁やひとり山田もるらむ

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍のにはに立つも立たぬも

つばめ飛ぶかげのみ見えて田植時いへに人なき小山田のさと

等の如く、戰時の御製に、國民の上をおぼし、田園の御製に、下民の實情に通ぜさせ給へる大御歌少からず拜せらる。

終りに、左に揭ぐる數首の御製は、神ながら神を祭らしゝすめらみことの大御歌として、たゞ人もて伺ひ奉るべからぬ深き御心境

ちはやぶる　神にかゝる枕詞。
手ぶり　風俗。
山松風　山の松に吹く風。

を詠み出で給へるものと申し奉るべし。

ちはやぶる神ぞしるらむ民のため世をやすかれといのるこゝろは

目に見えぬ神のこゝろにかよふこそ人のこゝろのまことなりけれ

わがくにには神のすゑなり神まつる昔の手ぶりわするなよゆめ

御製全體を通じて、我等が感じ奉るところは、一種雄々しく高く豊かに、かつ廣やかなる御調べなり。たとへば、うらゝかに晴れたる空に高鳴る山松風を聞くが如く、その朗かなる御調べに、知らず識らず、大いなる帝王の威徳に畏けれども身の溶化せらるゝを覺ゆるなり。これぞまさしく、天皇の歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特質とたゝへまつるべく、讃歎景仰しまつりて止むこと能はざるところなり。

景仰

昭憲皇太后御歌

北海道へみゆきましましけるころ

宮城野の萩のさかりを見ましてもみ苑の秋をおぼしいづらむ

北海道に渡らせ給ふを思ひやり奉りて

民のためいでますみちぞ北の海の霧もみ船をよきて立たなむ

おなじ頃栽菊といふことを

かへりますほども近しと菊の花植ゑて待つこそ樂しかりけれ

二　日本精神と闇齋先生

　安政三年四月、拔擢重用すべきが故に歸國すべしとの内命をうけたる橋本景岳は、當年僅かに二十三歳、位置をいへば微々たる一御書院番に過ぎなかつたに拘らず、必ずしも此の拔擢の藩命を喜ばず、却つて重臣の方針と決意とを反問し、審かに國是論・時務策を述べ、若し重臣の此の説を容れ、之を斷行する決意あらば、朝に命を蒙つて夕べに上途し、いかなる難任重責にても辭避すべからず、臣子の職、國家に忠節を致すほど結構の事なし、一身の利害は論ぜざる所であるが、しかしながら重臣の間に明斷果決なく、徒に議論に日を暮らして歎息するのみならば、我その話し相手となる事好ましからず、願はくは我を除外せられたく、歸國の意志は毛頭なし、違

闇齋先生　名は嘉、通稱嘉右衞門。江戸時代の朱子學者。又、垂加神道の樹立者。彼の思想は後に水戸學に影響し、維新倒幕の原動力となれりといはる。天和二年歿。年六十五。（二二七八—二三四二）

安政　孝明天皇の御代の年號。（二五一四—二五一九）

橋本景岳　名は左内。幕末の志士。越前福井藩士。安政の大獄に坐して刑死す。年二十六。（二四九四—二五一九）

命の御叱りは恐入る所であるが、本心を枉げて利勢につき、權門の機嫌を取り重役に調子を合せる職には、任命せらるゝ覺えなし、大丈夫憂ふる所は國家の安危、擇ぶ所は義の至當と不當とのみ、其の他は論ぜざる所である、と答へた。弱冠二十三歳にして、微々御書院番にして、しかも拔擢の恩命にあづかりながら、昂然として重臣に質す痛快の態度は、偏に一身を以て國家に捧げ、進退すべて義によらんとする平生の用心砥礪より出で來るもの、出處利によらず、只義の至當に就かんとする好個の一例を、我等は近くこゝに見る。しかるに此の精神は、突然として現れたものでなくして、遙かに之が先をなし、之を導いたものがある。

　天保十四年の冬か、翌くる弘化元年の事であらうが、京都所司代酒井若狹守忠義は、同藩出身の梅田雲濱が、京都に在つて望楠軒の

權門

弱冠

昂然　カウゼン。

砥礪　シレイ。又はテイレイ。とぎみがくこと。

出處

天保　仁孝天皇の御代の年號。（二四九〇—二五〇三）

弘化　仁孝・孝明天皇の御代の年號。（二五〇四—二五〇七）

京都所司代
酒井若狹守忠義　後忠祿と改む。若狹小濱藩主。明治六年歿。年六十一。

梅田雲濱
名は源次郎。幕末の勤王家。安政五年獄死す。年四十四。（二四七五―二五一八）

惻々

妻は病牀に云々
「妻ハ臥シ病牀ニ兒ハ泣ク飢ニ。此心誓ッテ擬ス拂ハント戎夷ヲ。今朝死別兼ニ生別。唯有リ皇天后土ノ知ル。」

抱關擊柝
ハウクワンゲキタク。門番・夜まはり番等の卑しき役。

講主となり、子弟を教育しつゝあるを聞き、使者を遣して之を召し、書を講ぜしめようとした。雲濱は終生貧窮、「妻は病牀に臥し、兒は飢に泣く。」の句、今に惻々として人の心を傷ましめるのであるが、窮乏の中にあつて志氣毫も撓まず、酒井若狹守の態度の傲慢なるを見て其の召命を辭し、「侯若し藩士として我を用ひられようとするならば、抱關擊柝といへども謹んで命を奉じ、以て父祖以來の御恩に報いたいと思ひますが、若し我によつて誠に道を聞かうと希望されるのであるならば、須らく禮儀を以てせらるべきであります。師重くして道始めて重し、我輕輩なりといへども道を負ふもの、身は屈すべし、道は屈すべからず。」と答へ、使者の往復三度に及んだが、雲濱は「かくの如くにして往く、これ侯に益なく、我に失あり。」といつて、あくまで之を固辭してしまつた。石津灌園の梅處士傳略には、

嘉永
孝明天皇の御代の年號。（二五〇八―二五一三）

窮士

之を安政三四年の事としてあるが、酒井若狹守の京都所司代となつた時を考へるに、前に天保十四年に任じて嘉永三年にやめ、後に安政五年六月に任じて九月に雲濱の就縛となつたので、安政三四年には酒井若狹守は所司代でなく、その再任は就縛の三月前であつて、事情叶はず、上述の逸話は之をその初任の時、即ち天保十四年の暮か、弘化元年の事とすべきであらう。殊に西川正義の梅田先生行狀が、之を以て雲濱が大津より京都に移れる直後の事としてゐる以上、之は信用してよろしいと思はれる。しからば、當時雲濱二十九歳若しくは三十歳、名いまだ聞えざる窮士でありながら、道を重んじて出處苟もしなかつた事はまことに驚くべきものがある。

進退一身の利害によらず、專ら義の推す所に從はんとする態度、

井上河内守正利　常陸笠間の城主。寺社奉行。延寶三年歿。年七十。（二二六六―二三三五）

我等はこゝに重ねて適例を見得た。しかも是亦雲濱に始まらず、その先をなし、之を導いたものがある。即ち我等は是等と殆ど同様の態度を、遠く溯つて山崎闇齋先生に見るのである。

山崎闇齋

闇齋先生の初めて江戸に赴かれた時、貧寒書籍を買ふ能はず、本屋の隣に間借りをして、近隣のよしみによつて書物を借りては讀んで居られた。その時分井上河内守正利學問を好み、本屋も侯の邸へ出入りしてゐた。或日侯から「誰ぞ師範となるべき人を知つてゐるならば推薦してくれるやう。」と頼まれたので「この頃京都より參りました山崎嘉右衛門といふ儒者が私の隣に住んで居ますが、どうもなみ〳〵の學者とは違つて、すぐ

毅然

れた所があると思ひます。之を御採用下さるならば本人は非常に喜ぶ事でありませう。」と申したので、「しからばつれて來るやうに。」との事で、本屋は早速之を先生に告げると、先生は毅然として之に答へて、「侯もし道を問はんと思はれるならば、御自身先づこちらへ來られたがよろしからう。自分の方から參る事はお斷りする。」といはれたので、本屋は呆れて世間知らずの我儒者と思ひ、推薦を取消す氣になつてしまつた。後日侯から先日の話はどうなつたかと尋ねられたので、詳しく右の次第を述べて、あれは少し氣が變でありますから誰か別人を御採用いたゞきたいと申上げると、侯は深く感歎して、それこそ本當に師とすべき人物であるといつて、即日山崎先生を訪問せられたといふ。これは原念齋の先哲叢談にも見え、又細野忠陳の闇齋先生行狀圖解にも載せてあつて、廣く

寺社奉行

朱子 名は熹。支那宋代の大儒。朱子學の祖。慶元六年歿。年七十。(西暦一一三一―一二〇〇)

明暦 後西天皇の御代の年號。(二三一五―二三一七)

萬治 後西天皇の御代の年號。(二三一八―二三二〇)

知られてゐる話である。但し後書に「此の事、井上侯京都所司代にて在京の時の事なりともいふ。未だ孰れか是なるを知らず。」と疑を存してゐるが、井上河内守正利は寺社奉行にはなつたが、京都所司代に任ぜられたことは曾てなく、それ故に後の説は問題にもならないのである。殊に先生自ら草せられた山崎家譜に、その初めて江戸に出られたのは明暦四年二月の事であつて、この時井上河内守に仕へたと書いてあり、先生の作られた堯暦序にも「明暦四年の春、柯(先生の別名)武江に遊び、井上河内守の家に於て、其の調ぶる所の堯暦一巻を閲し、一に朱子の考ふる所に據りて以て之を成す。」とあるから、かたがた右の話は明暦四年の事に相違ない。明暦四年は即ち萬治元年であつて、當時先生四十一歳、學問漸く深く、識見亦高しといへども、名聲未だ著聞せず、從つて普通の人々には貧窮

龜鑑 キカン。てほん。

平泉澄 文學博士。國史學者。東京帝國大學助教授。

の老書生と見えたであらうが、しかも道を尊び、義を重んじ、五萬石の大名を向うへ廻して屈せず、出處進退苟もせざる態度は、井上河内守にあらずとも、まことに歎稱の外はない。これこそ後年――雲濱にあつては百八十餘年後、景岳に於ては二百年後に、是等の後學をして利に迷ふ事なく、直ちに義の當否を檢せしめ、毅然たる態度を持して、出處進退苟もなさしめざりし龜鑑となつたものである。

(平泉澄――闇齋先生と日本精神)

鉾とりて守れもののふこゝのへの御階のさくら風そよぐなり

(孝明天皇御製)

天つ風吹くや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞ思ふ

(平野國臣)

阿部野　今の大阪市の天王寺から住吉までの間にありきと云ふ野。
霜月　正平二年(二〇〇七)十一月。この時楠木正行は山名時氏を破り、ついで細川顯氏を破る。
渡邊の橋　今の大阪市天滿橋と天神橋との間にありきといふ。
四條繩手　大阪府北河內郡四條村。
兩度の合戰　譽田林の戰と阿部野の戰のこと。

三　最後の參內

阿部野の合戰は、霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を溫め、藥を與へて創を療さしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、軈て彼の手に屬して、四條繩手の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿內多く敵の爲

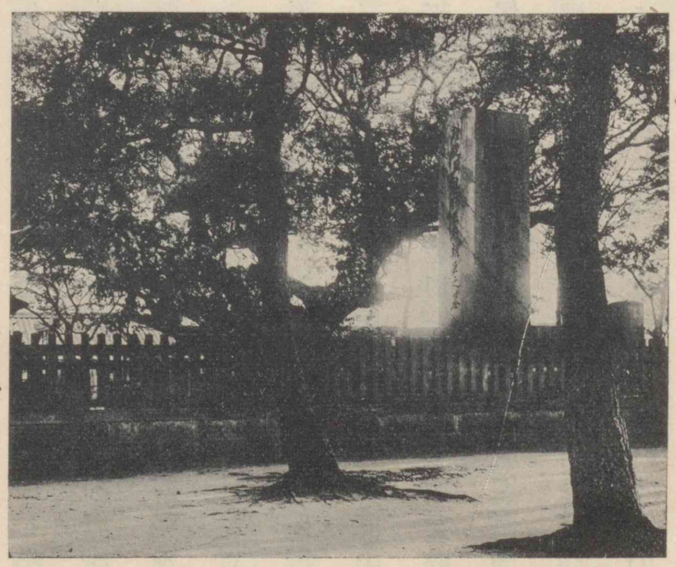
將軍　足利尊氏。
左兵衞督　足利直義。
執事　足利幕府の職名。將軍を輔佐する役。
高武藏守師直　本姓高階氏。足利氏の世臣。執事に補せらる。正平六年(二〇一一)歿。
越後守師泰　師直の弟。正平六年歿。
淀　京都府久世郡淀町。
八幡　京都府綴喜郡八幡町。
四條中納言　藤原隆實の子。吉野朝の忠臣。正平七年男山の戰にて戰死す。年六十。(一九五三―二〇一二)
尫弱　ワウジヤク。

に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衞督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成、尫弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歲に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで河內へ歸

先朝　後醍醐天皇。
宸襟
湊川　今の神戸市内にあり。
討死　延元元年五月十七日。
有待の身　凡夫無常の身。

し、『死に殘り候はむずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君の御代を鎭め參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに正行・正時、已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰を仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略のいふかひなき誇りに落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度



楠木正行の墓

かけ合ふ
傳奏　禁中にて武家より申出づる事を傳達奏聞する役。
南殿　ナデン。紫宸殿をいふ。
進退度に當り變化機に應ず

師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らむ爲に參内仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵、今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰、天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰命を下すべきにあらずといへども、進むべきを

股肱　ココウ。最も賴みとすべき輔佐の臣。
和田新發意　名は賢秀。楠木氏の一族。新發意は新に佛門に入りたるものゝ稱。
舍弟新兵衞　名は正朝。共に四條畷の戰にて戰死す。
如意輪堂　吉野山中にある淨土宗の寺。吉野朝の勅願寺。

知つて進むは、時を失はざらむが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせむが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけ、とかくの勅答に及ばず、只之を最後の參內なりと思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各〻名字を過去帳に書きつらねて、そ

如意輪堂

逆修　ギヤクジユ。生前に死後の供養を修めること。
太平記　四十卷。花園天皇の朝より後村上天皇の朝に至る約五十年間の事件を敍述せり。作者未詳。

の奧に、

　かへらじとかねておもへばあづさ弓なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切りて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

　さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に侵されさせ給ひて、崩れましましぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の淚もかきあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絕つとあれば、こゝにて留りたくは侍れど、神皇正統の邪なるまじき理を申し述べて、素意の末をも顯さまほしくて、强ひて記しつけ侍るなり。かねて時をも悟らしめ給ひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰せのまゝにて、後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふこと二十一年、五十二歲おましまし〳〵き。（北畠親房—神皇正統記）

龜山天皇　第九十代。

後醍醐天皇　第九十六代。

丹生の川上　丹生川上神社をさす。官幣大社。上社は奈良縣吉野郡川上村、中社は小川村、下社は丹生村にあり。上社は高靇神、中社は罔象女神、下社は闇靇神を祀る。何れも水神。

四　四方の海

龜山天皇

四方の海なみをさまりてのどかなるわがひのもとに春は
來にけり
世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶるかみは照らし
見るらむ

後醍醐天皇

この里は丹生の川上ほどちかしいのらばはれよ五月雨の
そら
都だにさびしかりしをくもはれぬ吉野のおくの五月雨の
ころ

後村上天皇　第九十七代。

尊良親王　後醍醐天皇の第一皇子。元弘の亂に際して、北條氏の爲に土佐に流され給ふ。延元元年金が崎に於て自刃し給ふ。御年二十七。（一九七一－一九九七）

宗良親王　後醍醐天皇の第八皇子。元弘の亂に敗れ、一時讃岐に遷され給ふ。建武中興瓦解後は東國の經略に努め給ふ。又歌に秀で給ふ。新葉和歌集の撰者。

後村上天皇

身にかへて思ふとだにも知らせばや民のこゝろのをさめ
がたさを
鳥のねにおどろかされて曉のねざめしづかに世をおもふ
かな

尊良親王

つかふべき人やのこるとやまふかみ松の戸ざしもなほぞ
たづねむ
わがいほは土佐の山風さゆる夜に軒もる月もかげこほる
なり

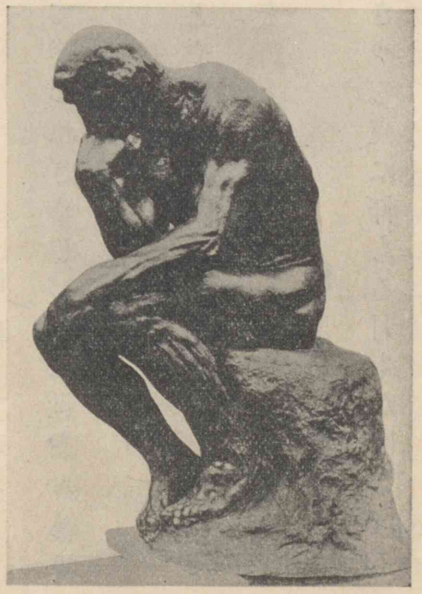
宗良親王

君のため世のため何か惜しからむ捨てゝかひあるいのち
なりせば

ロダン Auguste Rodin フランスの彫刻家。（一八四八—一九一七）
フロレンス Florence イタリヤ中部の都會。
驚異の眼
ミケランジェロ Buonarroti Michelangelo イタリヤの彫刻家・畫家。建築家。（一四七五—一五六四）

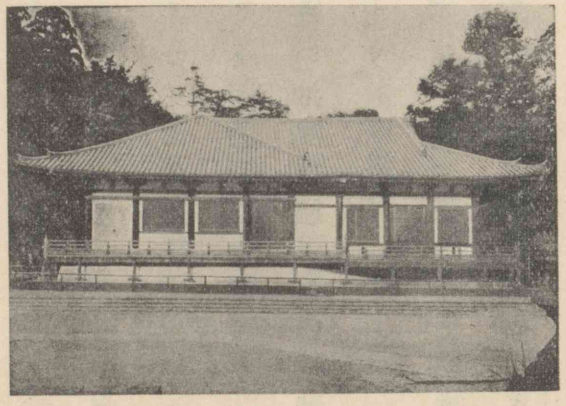
五 美術の鑑賞

ロダンが或時フロレンスの博物館に見物に出掛けた事がありました。彼は、其處に陳列されてた彫刻を順々に見て行きましたが、一つの彫刻の前に來ると、ふと足を留めて驚異の眼を瞠りました。それはミケランジェロの晩年の作品で、ぼんやりと物の姿の浮んでゐる未完成の粗末な大理石の一塊でした。彼はこの作品の中に未完成なものゝ美しさを發見しました。


考へる人 ロダン作

美への探求
美に憧れる心

今日殘されてゐるロダンの作品が、我等をして夢みるやうな美しさを感ぜしめるのは、實に此の時彼の魂の中に燃えてゐた、美への探求が然らしめたものであると云ふことが出來ます。館内に陳列されたミケランジェロのこの作品の前を、畫家や彫刻家は、幾百となく幾千となく通り過ぎたに相違ありません。今まで餘り注意されなかつた此の作品の價値が、ロダンによつて始めて發見されたといふことが出來ませう。


三月堂

此の話によつても分るやうに、作品を本當に理解する爲には、その人に理解するだけの教養がなくてはなりません。絶えず美に

三月堂 法華堂ともいふ。東大寺の境内にあり。本堂は天平五年（一三九三）創建。
恍惚 クワウコツ。
プラン Plan 設計。
奥床し
シャルダン Jean Baptiste Siméon Chardin フランスの畫家。（一六九九—一七六九）

憧れる心が働いてゐなければなりません。奈良の地に遊ぶ者は、誰しもあの三月堂の側面の美しさに恍惚となるでせう。「建築は凍れる音樂なり。」といふ言葉があります。三月堂のプランを作つた人の奥床しい心が偲ばれます。

かくの如く作家は、絶えず新鮮な美しさを求め、それを表現しようと努力してゐます。一見して美しさなどは轉つてゐさうにもない油臭い騒々しい機械の中からも、美しさを見出して呉れるのです。

シャルダンは、今まで誰も顧みなかつた臺所の隅から、銅鍋や玉葱などを取出して描きました。畫材になりさうにもなかつたそれらの物一つ〳〵に美しさを見出したのです。薄暗い光線は個個の皿や鍋や果物などによつて各〻異つた調子に相映じてゐる、そ

醸す カモす。
作家の個性

して濕つぽい臺所の空氣はしつとりと落著いた調和を醸し出してゐる、かうした微妙な感じをはつきりと摑んだ事が、彼の畫筆を動かす原因となつたのであります。つまり彼は、臺所の隅にも靜物としての美しさのある事を、見出して呉れたのです。

美術の鑑賞は、難しい一つの修業であります。修業が積めば積むほど、立派な鑑賞が出來るやうになつて來ます。總て美術上の作品は、美術家の個性から生み出されたもので、作品に就いてその作家の個性や製作上の苦心などを味はふことが、卽ち美術の鑑賞といふことになるのであります。畢竟、鑑賞とは味はふ事であります。この味はふ力は一日や二日で養はれるものではありません。幼兒に大人の食物が與へられないのと同樣な意味です。一枚の繪を見て、「自分には此の繪のどこが、よいのか、わるいのか、さつ

愛著 物をいつくしむ心がついて離れざること。
贋物 ニセモノ。

ぱり分らない。」と云ふ人があります。成程尤もです。それはまだ味はふ力が出來てゐないからで、最初からさう易々と分る筈はないのであります。然らばどうして味はふ力を養へばよいか。

先づ作品を愛することです。そして好きになることです。初めから嫌ひであれば、その人は全然美術を味はふ資格のない人で、問題になりません。幾分でも好きであれば、どんな人でも或程度までは鑑賞する力が出來るものです。好きになるには、作品に接する機會をつとめて多くすることです。展覽會でも博物館でも出來るだけ利用するがよいと思ひます。その間に次第に作品に對して愛著を覺えるやうになつて來ます。

こゝに附言すべきは、傑れた作家の作品を數多く味はふことです。贋物や拙劣なものをいくら見ても無駄です。寧ろ有害です。

科學 系統的組織を有する學問。
基調 或音階の第一音。又思想の根柢をいふ。こゝにては主要點といふ程の意。Keynote の譯語。
陶冶 タウヤ。

美術の鑑賞は、科學の研究とは違つて、感ずるといふことが中心の基調となるのですが、鑑賞上に必要な一般知識は備へてゐなければなりません。音樂を聽くには、樂譜に關する一通りの知識が必要であるやうに、繪畫を見るには繪具の名稱油繪と水彩畫との差ぐらゐは心得て置かねばなりません。また進んで美術史に關する一般知識があれば、尚更結構です。しかし作品を味はふ場合に、是等の書物に賴ることは、極力避けなければなりません。鑑賞は自分で味はふことですから、他人の見方と同じ見方をしなければならない理由はないのです。たゞ素直に自身の眼を以て見、自身の眼を以て味はねばなりません。

美術品にはそれ〲作家の品格が現れてゐます。立派な作品に接すればするほど、その人の品格は陶冶されて來ます。また

その人の教養が深くなればなるほど、作品の深い味が理解されて來ます。前に申しました美術の鑑賞は難しい一つの修業であるといふ言葉の意味が、ほゞこれで了解されたことゝ思ひます。

月見にいづれば、我に隨ひて來る影法師あり。汝は我が影なるか、人の影なるかと問へば、返したる歌とて、

我が影をわれぞとおもふ世の人にものいふ口はもたぬ影法師

（柳澤淇園—雲萍雜志）

仁和寺　京都市右京區にあり。
石清水　京都府綴喜郡の石清水八幡宮をいふ。
極樂寺　男山の麓にある寺。
高良　男山の麓にある神社。
ゆかし
先達　センダツ。
足鼎

六　仁和寺の法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて「年ごろ思ひつること、果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。

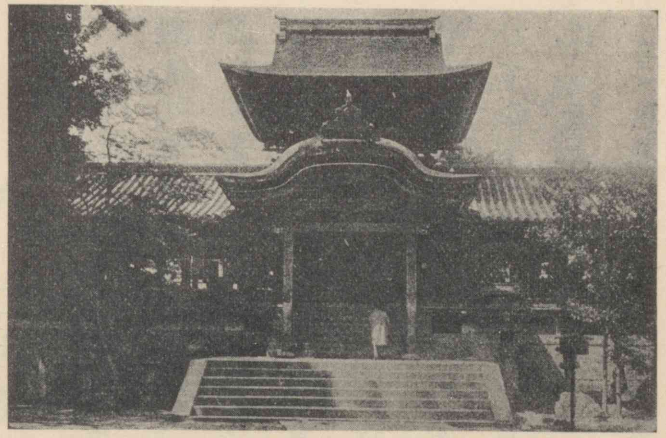
これも仁和寺の法師、童の法師にならむとする名殘とて、各々遊ぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、かたへなる足鼎を取りて頭

かづく

帷子 カタビラ。

くすしのがり

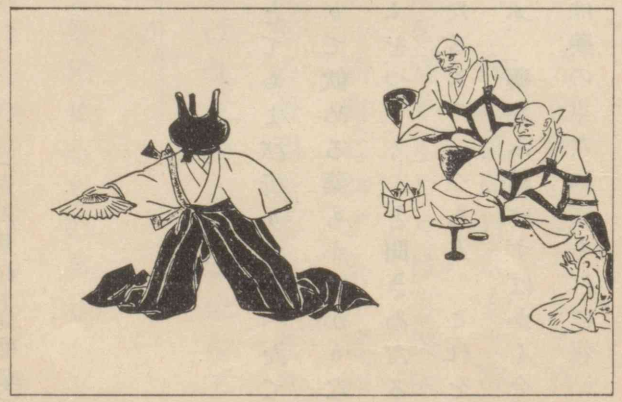
にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて顔をさし入れて、舞出でたるに、滿座興に入ること限りなし。しばし奏でて後、拔かむとするに大かた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打割らむとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけり。



石清水八幡宮

しべ

道すがら人の怪しみ見ること限りなし。くすしのもとにさし入りて向ひ居たりけむ有樣、さこそことやうなりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲めども、聞くらむとも覺えず。かゝる程に或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらむ。たゞ力を立てゝ引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てゝ、首もちぎる



鼎をどり

からき命

吉田兼好　本姓は卜部氏。汎く神・儒・佛の學に通じ、又和歌をよくす。後出家す。正平五年歿。年六十九。（一九四二―二〇一〇）

徒然草　二卷。兼好の隨筆。

ばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

（吉田兼好―徒然草）

ある吝嗇なるもの、「今年は殊に物費しぬ。」とて、および折りて數へたてつゝ、「まづ春より秋まで、かのいたづきによりて飲める藥もかばかりなり。それにかゝる事もありき。」など呟きいふを、つくづくと聞きゐたる人の「いと去り難きがうへに、君が身に附きたるもの一つあり。これをいかで費といはむ。」といへば、「何なるか。」と問ふ。「藥呑み給はずば、かく今日歎き事もえいひ給はじ。かくいひ給ふは藥の惠なれば、それに報い給ふを費と心得給ふか。」といひき。

（松平定信―花月草紙）

ほとゝぎす云々　千載集、後徳大寺實定の歌に、「ほとゝぎす鳴きつる方をながむればたゞ有明の月ぞのこれる。」とあり。

四方赤良　本名は太田覃。又は南畝・蜀山人と號す。徳川幕府の士。狂歌師。江戸の人。文政六年歿。年七十五。（二四〇九―二四八三）

七　狂歌と川柳

我が國民は、本來快活にして光明を喜び、笑を好むよりして、自然國文學にも滑稽を主とする作尠からず。殊に眞面目なる文學と同一の形を借りて、これに滑稽なる題材を盛り、もしくは可笑味を帶びたる表現法を取れるもの發達せり。謠曲に對する狂言、和歌に對する狂歌、俳句に對する川柳の如き、その著明なるものなりとす。就中、近世、江戸の地に於て盛んに行はれ、江戸人の愉快なる面目を窺ふに足る可きは、狂歌と川柳となり。

狂歌は、有名なる古歌に基きて、これを茶化せるもの多し。

ほとゝぎす鳴きつるあとにあきれたる後徳大寺のあり明の顏　　四方赤良

一つ捕り云々　千載集、藤原俊成の歌に、「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草のさと。」とあり。

栞も無き云々　山家集に、「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮。」とあり。

唐衣橘洲　本名は小島泰從。狂歌師。江戸の人。享保二年歿。年六十。(二四〇三—二四六二)

もどく

天地の云々　古今集の序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。」とあり。

宿屋飯盛　本名は石川雅望。國學者。小說家。江戸の人。天保元年歿。年七十八。(二四一三—二四九〇)

一つ捕り二つ捕りては燒いて食ふうづらなくなる深草のさと　同人

栞も無き膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕ぐれ　唐衣橘洲

これらはすべて古歌の知識ありて、一層その興趣を味はふべし。その他、和歌に關する典故・故事等を滑稽化せるもの多きは、元來和歌をもどきて興とするに由るものならむ。

歌よみは下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは　宿屋飯盛

すみだ川いまはあづまのみやこどり業平などはざいご中將　四方赤良

の如き、これにして、一は古今集の序に依り、他は伊勢物語によりて

すみだ川云々　伊勢物語に、「名にしおはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと。」とあり。

頭光　本名は岸誠之。狂歌師。江戸の人。寛政八年歿。年七十。(二三八七—二四五六)

木端　姓は丸子氏。狂歌師。大阪の人。安永二年(二四三三)歿。

鹿津部眞顏　本名は北川嘉兵衛。狂歌師。江戸の人。文政十二年歿。年七十七。(二四一三—二四八九)

作爲せり。なほ古歌・故事に直接の關係なき作には、

ほと〻ぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里　頭光(つむり)

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしてはくらされもせず　木端

なま醉の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり　四方赤良

あらそはぬ風のやなぎの糸にこそ堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ　鹿津部眞顏

等の類にして、おのづから歌語に富めるは、本來和歌より派生せるものなればなるべし。

川柳は、俳諧の附合せより發達せるものにして、獨立して俳句と

穿ち
破顔一笑

同じ詩形を借りて、主として人事の穿ちを詠じ、皮肉滑稽を旨とするに至れり。

川柳の妙は、繁雑なる人間生活の中に詩趣を認むるにあり。蟲干、煤掃の如き人事も、

武者一人叱られてゐる土用干

手の甲へ餅を受取る煤はらひ

と詠出されては、思はず破顔一笑を禁ぜざるなり。

元日の町はまばらに夜が明け

川どめにてにはを直す旅日記

口上をいふ手の赤き雪の朝

の如き、人生何處か詩ならざらむやの感あり。

雷をまねて腹掛やつとさせ

辛辣　シンラツ。
人情の機微
扶剔
これを言ふ者云云　詩經の序に、「言フ之ヲ者無ク罪、聞ク之ヲ者足ルレ以テ戒ムルニ」とあるによる。
道義

天眞の幼童を點出して、情味饒かなるものといふべし。辛辣に人生を批評して皮肉に滿ちたる句には、

泣く泣くもよい方をとる形見わけ

ちよつとゐてくれろとなでる暮の金

しかたなく辭世をほめて醫者は立ち

等ありて、よく人情の機微を描けり。川柳は人事の百般を描き、好んで人の心情を扶剔すれども、おのづからにして諷喩の氣あり、かのいはゆるこれを言ふ者罪無くしてこれを聞く者以て戒むるに足るものなり。されば、

神代より日月いまだ地に落ちず

と道義の儼として存することを歌ひ、

農民の手に豆が出來米が出來

詠史
道風　小野道風。平安時代の書家。三蹟の一。康保三年歿。年七十一。（一五五六—一六二六）
文王　支那周の名君。武王・周公の父。（—西紀前二三五）
佐野　佐野源左衞門尉常世。
戸塚の坂　神奈川縣鎌倉郡にあり。

と勞働の神聖なることを詠めり。その人物を描きておのづから目に見ゆるが如きものには、

米つきに所を聞けば汗を拭き

あり、故事を詠みたる、又は詠史の句には、

芭蕉はとび込み道風はとび上り
お母さん又越すのかと孟子いひ
釣れますかなどと文王そばへより
義貞の勢はあさりをふみつぶし
清盛の醫者ははだかで脈を取り
佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

等あり。以て人生を快活にするに足るべく、往々にして一篇の史論たるに足るものあり。

ゑぼし親　男子元服の時、之に烏帽子を著せ、烏帽子名を附くる人。
北條時政　武將。頼朝を助けて鎌倉幕府の建設に大功あり。頼朝の室政子・義時の父。建保三年歿。年七十八。（一九〇八—一九八五）
使嗾
躍如

ゑぼし親祖父の敵も討てといふ

曾我兄弟の烏帽子親なる北條時政が、兄弟を使嗾して祖父の敵なる頼朝を討たせむとせりと論ず。當否は別として、深刻なる批評といふべし。

川柳はもと江戸に發達して人事を描くに妙を得たり。然れども又時に自然を寫して、俳句とは別様の趣あるもの無きにあらず。

白鷺は五位鷺よりも暮れ残り
おさへれば薄はなせばきり〴〵す
よつぴいてひやうと放たぬ案山子かな

誠に人間の見たる自然の、此處に躍如たるを見る。

萬葉集　二十卷。撰者及び撰定年代未詳。
古今集　二十卷。我が國最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の延喜五年（一五六五）紀貫之等勅を奉じて撰集す。

八　民謠

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特殊の形式を備へたものは、移つて長歌短歌となつて、かの萬葉集時代に於て大いなる發達を遂げた。然るに、この萬葉集時代に緊張の頂點まで達した長歌短歌は、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の狀態を呈出するに至つた。

これらの勅撰集に於ける和歌の多くは、形式を整へるに汲々として作り出されたもので、一般に內容の萎縮は免れ難いところであつた。故に余は、民衆の心理から生れ出た萬葉集の精神は勅撰集には存せずに、却つて民族的歌謠の一分流であるところの民謠

勅撰集時代　醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられし時より、後花園天皇の時新續古今集を撰せしめられし時まで、約五百三十餘年間をいふ。
神樂歌　神樂に合せて歌ふ歌。
催馬樂　上代民謠の一種。
澤田川　京都府相樂郡にあり。
久邇　聖武天皇、天平十二年（一四〇〇）十二月都を平城より遷し、同十六年正月難波宮に遷り給ふまでの都。今の相樂郡木津町・加茂町・上狛町・瓶原町地方一帶の地。

の方面に傳はつてゐると信じてゐる。

このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことが出來るのである。

銀の目貫の太刀を、下げ佩きて、奈良の都を、練るは誰が子ぞ、練るは誰が子ぞ。（神樂歌）

澤田川、袖漬くばかり淺けれど、はれ、淺けれど、久邇の宮人高橋渡す、あはれ、其處よしや、高橋渡す。（催馬樂）

これらは、ほんの一例に過ぎぬが、これらの民謠から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謠の系統は、足利・德川の各時代を經て、順次に發達推移して今

惆々

漂泊

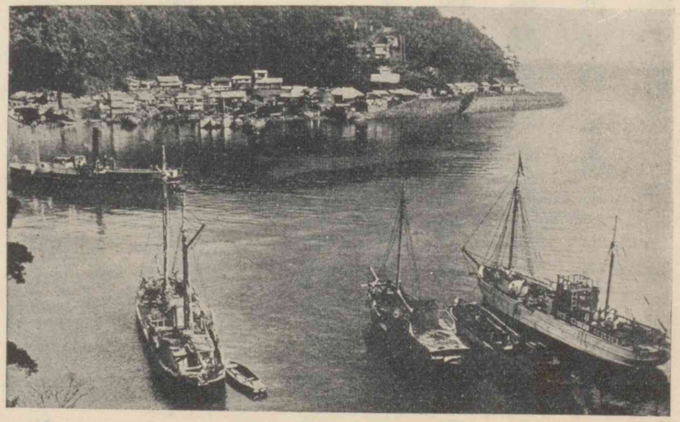
乳が崎　伊豆七島中の大島の西北端。

日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産出したところの惆々として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましよが、それから先は神だのみ。

の唄の如き、必ずしも船頭とばかりは言へぬが、絶海の孤島に頼り



大島波浮の港

淺間　長野縣と群馬縣との境に跨る活火山にして、海拔二五四二米。

追分　長野縣北佐久郡にあり。今西長倉村と改む。もと中仙道と善光寺道との分岐點。

碓氷峠　淺間山の東南。群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にあり。海拔約一〇〇〇米。

坂本　群馬縣碓氷郡にある町。碓氷峠の東麓。

中仙道　東山道を經て東京より京都へ行く街道。

輕井澤　長野縣北佐久郡にある町。碓氷峠の西麓。

なく住む人々の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹さを味はふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかる。淺間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が、旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの唄の心である。一夜の宿を勸める歌謡を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀れな漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いつも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北にな

愛娘　マナムスメ。
人麻呂　柿本人麻呂。歌人。持統・文武の兩朝に仕ふ。
貫之　紀貫之。平安朝時代の歌人。天慶九年歿。年六十五。（一五四二―一六〇六）

れば日は晴れる。煙が北へ靡けば、明日は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」は、この嶮岨な坂道を上下する脚絆・草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

　麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れば親里がこひしや。

輕井澤高原より淺間山を望む

麥をつくのは農家の新婦である。嫁入して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落著かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麻呂・貫之の秀歌にも優るものがあらう。

職業的個性

これ等の唄は、その生活から生れたものであつて、その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして民謠としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謠ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出來ない。民謠がその土地の持つ情調に濃厚に著色されることは誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が、島に生れ「淺間の煙」の唄が、信濃高原に點在する宿驛の間に生れ「麥ついて」の唄が、伊豆南方の田舍に生れてゐる事を考へ合せると、民謠と地方との關係を、ほゞ推測することが出來よう。たゞ、民謠の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へ

轉訛

地方的個性

甲斐　山梨縣。

稻生澤村　靜岡縣賀茂郡にあり。

て、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も、土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

　大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ。

と、唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はゝれる。

　この苗をとりあげて、どこに棲まずや、いなごや、きりすゝき、すき葦のこやのうらに棲まずや。

　これは、伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌謠は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそ

いそしむ

れ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。このやうな美しい心情を持つた民謠が、今日の日本に殘つてゐて、現に農民の口に唄はれてゐることは、我が民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすすきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか。」といふその心は、なんといふ單純な、同情の籠つた、愛に滿ちた心であらう。大自然の中に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にまで親しい心を持つ農民の生活が、涙ぐましいまでに尊いではないか。「この苗を取りあげて」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて。」であつて、それが苗取唄に轉用されたものと思はれる。　この

八が嶽　長野縣と山梨縣との境に在る山。海拔約二八九九米。

唄は他の地方にも殘つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越しや强清水（こはしみづ）。

これは信濃の民謠中出色の一つである。草刈馬に乘つて、八（やつ）が嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの强清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

（島木赤彦の文による）

チャルメラ　Charamela

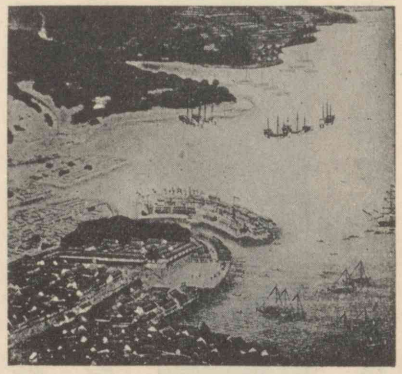
頑是なし　グワンゼなし。きゝわけなし、辨別なし。

ものがなしさ

九　ちやるめら

滅びたものは懷かしい。廢れたものには情がひかれる。

昔、西洋から傳はつた樂器のうちに、チャルメラといふ喇叭のやうな吹管樂器がある。今でも片田舍などには聞かれるであらうが、都會でもつい近頃まで、よく飴屋などが吹いては、頑是ない子供らを寄せ集めて居た。



昔の長崎港

江戸時代には唐人笛とも唱へ、時には喇叭と同じに見做されたこともあつたが、どこかに田舍びたやうな、いくらか異國の感じを起させるやうなものがなしさで、又悠長な響をもつてゐた。幕末

銅鑼　紫銅にて作り、形金盥の如し。桴を以てうつ。

長崎歳事記　二卷。長崎に於ける正月より十二月までの毎月の行事・風俗・習慣等を記したるもの。野口文龍の著。寛政九年成る。

役懸り　或役に當れる者。

寛政　光格天皇の御代の年號。（二四四九—二四六〇）

の頃は、輕業師なども使つてゐたといふ。無論、最初傳はつた本場は、長崎あたりであつたに違ひない。

長崎には、九州の他の地方と同じく、これをチャンメラと發音して、チャンメラ吹きと稱する職業もあつて、毎年正月中には、この樂器と共に銅鑼や片張の太鼓をたゝいて、市中の家々を歩き廻つたといふ話である。なほ長崎歳事記によると、チャンメラを吹き歩く者は、無刀で古袴を著けてゐたので、役懸りの者で古ぼけた袴を穿いてゐるのを、諺にチャンメラ吹きとあざ名したものだとある。これは今から百二三十年前にあたる寛政年代の風俗である。そ

ちやるめら吹き

明　（西暦一三六八—一六六一）

萬曆　明の神宗の代の年號。（一五七三—一六一九）

正德　明の武宗の代の年號。（一五〇六—一五二一）

嘉靖　明の世宗の代の年號。（一五二二—一五六六）

回族　回紇族をいふ。トルコ族の一部族。

三才圖會　百六卷。明の王圻の撰。

の外、長崎では唐人の葬式の時葬列でこれを奏したものだ。今でも支那ではさうだと聞いてゐる。

支那では明末以來、この樂器の名が文獻に出てゐる。萬曆以後の辭書などに見えてゐるが、或は正德・嘉靖の時代に、葡萄牙の船舶から南方の港などに傳はつたのではないかとも思ふ。

哨吶とも鎖吶とも其の他色々に文字をあてゝゐる。辭源には、もと回族の用ひたもので、原名を蘇爾奈といふと出てゐるが、或はさうかも知れぬ。三才圖會によると「本何の代に起るかを知らず、軍中の樂であつたが、今は民間に多く用ひる。」と記してあるから、萬曆以前久しい傳來であるとすると、南蠻傳來說は間違ひとなるわけである。

かういふ考證は、他日別にすることゝして、とにかくこの鎖吶は、軍中の樂器としてなり、民間の樂器としてなり、近世支那に

羅山文集　七十五卷。林羅山の文を收む。羅山は德川幕府の儒官たる林家の祖。剃髮して道春といふ。明曆三年歿。年七十六。（二二四二―二三一七）

亞媽港船擊沈事件　亞媽港は廣東省の南部に位す。今澳葡萄牙領。門（Macao）といふ。嘗て亞媽港人が邦人を殺せしを以て、有馬晴信その來航するに及びて之を擊沈す。

用ひられ、やがて日本にも傳來したのであるが、この漢字で書き傳へられたものでは、羅山文集に出てゐるものが最も古い。

羅山が慶長十四年長崎の港内で起つた有馬氏の亞媽港船擊沈事件を敍した文章に、長崎逸事といふ記事があるが、その時敵船の中に、鎖吶や喇叭などを奏して大騷動をしたといふ。但し、その文字を誤つて口扁に質の字としてシツトツと振假名をつけてある位であるから、よしや後年の版本の誤であるとしても、慶長年代にはまだ珍らしい樂器であつたに違ひない。これは軍樂器としてであるが、德川時代を通じて、江戶城に參見に來た琉球使節が、城中で演奏した歌舞にも、それが每度用ひられた。また朝鮮使節が幕府に參賀に來た時にも、途中で之を吹奏した。朝鮮ではこれを太平簫と稱へた。いかにもその響に泰平の趣が味はへもしたらう

李朝　西曆一三九三年李成桂國内を統一して王位に卽きしより、相承くること二十六世、李熙の時に至り、日本に合倂す。

クラリネット　Clarinet

オーボエ　Oboe

が、朝鮮では李朝の初めに、西北地方からこれを軍樂器として傳へたといふから、支那に於けると同じく南蠻傳來でなくて、北狄・西戎系統といふ考を强める一資料になるかも知れない。

支那に居る西洋人は、これを支那のクラリネットと呼んで居る。いかにも相當な對比である。古く日本では喇叭とも混同してゐたことがあるが、まづ喇叭の一種と呼んでもゆるされるであらう。葡萄牙語のチャラメラは、佛語のシャリュモー、英語のシャルムまたショーム、獨逸語のシャルマイに當るので、語源は拉甸語のカラムスにまで遡るので、單に管といふ意味であつた。中世期まで普く用ひられたが、段々進歩して遂にオーボエにまで發達してしまつた。これらの吹管樂器の沿革については、專門家を煩はすより外はないが、古いところのものは、東洋のチヤルメル、或は哨吶と構

パアン　Pan　ギリシヤ神話中の神。森林・牧畜・狩獵の神。牧人の音樂を掌る。

遺韻

上田柳村　名は敏。文學博士。英文學者。詩人。京都帝國大學教授たりき。東京の人。大正六年歿。

鈍色　ニビイロ。

成が似てゐる。よく古畫には見かける圖であるが、一寸その恰好が同じ樣に見える。遙か昔に遡つてゆくと、牧羊神パアンが吹く笛にまで達するので、近世のオーボエ式、またシャルマイ系の吹管に進まずに、うぶな姿、をさない時代の名殘をとゞめたまゝの牧笛風のものは、後代もあちこちに傳はり、時勢おくれの遺韻をひゞかせてをる。パアンの笛の調べは、上田柳村の名篇であつた牧羊神の長詩にも見えて、人の知る所であるが、その題名の詩集のうちに、別に「ちゃるめら」と題して、廢れた唐人笛の古韻をしのばせた一曲がある。

薄日のかげも衰へて、
風冷やかに雲低き
鈍色空のゆふまぐれ、

はづれの辻のかたすみに、
ちゃるめらの聲吹きおこる。
…………。

（新村出—南蠻更紗）

君聞かずや、胡笳の聲最も悲しきを。
紫髯綠眼の胡人吹く。
これを吹きて一曲猶未だ了らず、
愁殺す、樓蘭征戍の兒。
涼秋八月蕭關の道。
北風吹斷す天山の草。
崑崙山南、月斜ならむと欲す。
胡人月に向つて胡笳を吹く。
胡笳の怨、將に君を送らむとす。
秦山遙かに望む隴山の雲。
邊城夜々愁夢多し。
月に向つて胡笳誰か聞くを喜ばむ。

（岑參—胡笳引）

俊寛　僧都、法勝寺の執行たり。平清盛の專横を憤り、治承元年(一八三七)藤原成親等と謀りて兵を擧げんとし、事露れて鬼界が島に流さる。同三年配所に歿す。年三十七。

磽确　カウカク。石の多いやせ地。

一〇　俊寛

船は俊寛の苦悶などには何の容赦もなく、半刻も經たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に紛れ込んでしまつた。船の姿を見失うた時、俊寛は絶望の爲に昏倒した。昨夜來叫び續けた疲勞が、一時に發したのだらう、そのまゝぼうつとして眠り續けた。

彼は巖壁の上で昏倒したまゝ、何時間眠つてゐたかは自分にも分らなかつた。一度目覺めた時は夜だつた。彼は自分の頭の上の大空が、大半暗い雲に掩はれ、其の僅かな切目から二三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渇と全身を碎くやうな疼痛とを感じた。彼は水を飮みたいと思ひながら、周圍を見廻した。が、巖壁の背後は、すぐ磽确な山になつて居るらしく、小川とか泉とかゞありさうにも思へなかつた。それでも烈しい渇は、彼を一刻もぢつとしてはゐさせなかつた。彼は寢てゐた岩から身を剝がすやうにしてたち上つた。たち上る時、體の諸〻の關節が音を立てゝ軋るやうに思はれた。彼はそれでも這ふやうにして巖壁を下りることが出來た。彼は、晝間——それは昨日であつたか一昨日であつたか分らなかつたが——夢中で走つた道を二町ばかり引返した。彼は晝間其處を走つた時、榕樹が五六本生えてゐて、其の根に危く躓きさうになつたのを覺えてゐた。彼の濁つてしまつて居る頭の中にも、榕樹の周圍を探せば水があるかも知れないと言ふ考が、ぼんやり浮んでゐた。

彼は、榕樹の生えて居る周圍を、海の水明りで二三度探し廻つて見たけれども、其處には一面の唐竹が密生して居るだけで、水らし

榕樹　アカウ。暖地の海邊に自生する喬木。桑科に屬す。

唐竹　タウチク。竹の一種。支那の原産なれど、廣く栽植せらる。高さ五米乃至六米。

信天翁　アハウドリ。游禽類に屬する海鳥。

いものは少しも見當らなかつた。彼は其の捜索に、殘つてゐた精力を使ひ盡して、崩れるやうに地上へ横たはると、再び昏々として眠り始めた。

彼が二度目に目を覺ました時、それは朝だつた。疲れ萎びて居る彼の頰にも、朝の微風が快かつた。彼が目を開くと、自分の體の上に茂り重なつて居る蒼々とした榕樹の梢を洩れる清々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて自分の體に注いでゐるのを見た。流石に暫くの間は淨らかな氣持がした。が、すぐ二三日來の出來事が惡夢のやうに歸つて來、そして、烈しい渴を感じたので、彼はよろ〱と立上つた。それでも、縹渺と無邊際に擴がつて居る海を、未練にもまう一度見直さずには居られなかつた。が、群青色に遙々と續いて居る大洋の上には、信天翁の一群が飛び交うて居

成經　大納言藤原成親の子。治承元年俊寛と共に鬼界が島に流さる。建仁二年歿。年四十七。(一八一六—一八六二)
康頼　平康頼。成親・俊寛等と平氏討滅を謀り、鬼界が島に流さる。
視野
基康　藤原基康。鬼界が島へ成經・康頼の赦免の使となりて行く。
瞋恚　シンイ。

る外は何物も見えなかつた。成經や康頼を乘せた船が、今まで視野の中に止まつて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げた時、身を燒くやうな渴と餓とが、烈しく身に迫つて來た。彼は赦免の船が來て以來、何も食べてゐないのだつた。基康は流石に彼を憐がつて、船の中で炊いた飯を持つて來てくれたのだつたが、瞋恚の炎に心を焦がしてゐた俊寛は、其の久しぶりの珍味にも目をくれないで、水夫の手からそれを地上にたゝき落した。無論、今でも自分の小屋まで歸れば、乾飯も澤山殘つて居る。が、彼には一里に近い道を歩く勇氣などは殘つてゐなかつた。

烈しい渴と餓とは、彼の心を荒ませて、自殺の心を起させた。彼は目の前の海に身を投げることを考へた。そして、何故基康の船

歸洛　歸京。

椰子　椶櫚科に屬する常綠喬木。高さ二〇米以上に至る。

が居る中に死なゝかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成經康頼の目の前で死んだならば、少しは腹いせにもなつたのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうといふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に斷たれながら暮らして行くことは、彼には堪へられなかつた。二十間許り向うの岸に一つの岩があり、其の下の水が殊更に深いやうに見えた。

彼が決心をしてたち上つた時、彼はふと水の匂を嗅いだ。それは眞水の匂だつた。極度に渇して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は水の匂を嗅ぐと、其の方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を彼は獸の樣に潛つた。十間許り潛つた時、其の林が盡きて、其處から岩山が聳えてゐた。

彼はふと、其處に大きい岩を背後にして、此の島には珍らしい椰

鹿が谷　京都市左京區如意が岳の西麓にあり。俊寛の山荘のありし所。

清洌　セイレツ。

子の木が十本許り生えて居るのを見た。そして、其の椰子に蔽はれた鳶色の岩から、一條の水が銀の絲のやうに滴つて、それが椰子の根元で小さい泉になつて居るのを見た。水は淺い乍らに澄みきつてゐて、沈んで居る木の葉さへ一々に數へられた。渇し切つて居る彼は、犬のやうにつくばつて、其の冷たい水を思ひ切りがぶがぶと飮んだ。それが何といふ快さだつたらう。それは彼が鹿が谷の山荘で飮んだ如何なる美酒にも勝つてゐた。彼は其の清冽な水を味はつて居る間は、清盛に對する怨も、島に只一人殘された悲みも、忘れ果てたやうに、清々しい氣持でゐた。彼は蘇つたやうな氣持になつて立上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つて居るのを見た。彼は疲勞を忘れて猿のやうに攀ぢ登つた。それを叩き落すと、傍の岩で打碎

丹波少將　成經。
平判官　康頼。
丹左衞門尉　基康。
陷擠　カンセイ。

き、思ふさま貪り食つた。

彼は生れて以來、是程の有難さと是程の旨さとで飲食したことはなかつた。彼は椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。清盛・平家の一門・丹波少將・平判官・丹左衞門尉、そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、此の口の中の總てを、否、心の中の總てを溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虛な、つまらないもの〻やうな氣がし始めた。

彼は口の中に殘る快い感覺を樂しみながら、泉の畔の青草の上に寢た。そして、過去の自分の生活の色々な相（すがた）を心の中に想ひ出して見た。都に於ける種々の暗闘・陷擠・戰爭・權勢の爭奪、それから來る嫉妬・反感・憎惡、さういふ感情の動くま〻に狂奔してゐた自分

餓鬼
煩惱　ボンナウ。
淨土　人間界を穢土といふに對して、彌陀の國をいふ。
執著　シフヂャク。
焦熱地獄　火で亡者を苦しむる地獄。
懶し　モノウし。
眞如の生活
撫子　ナデシコ。石竹科に屬する多年生草本。九月頃に淡紅の花を開く。

のあさましさが、しみ〴〵と解つたやうな氣がした。船を追つて狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうにあさましい氣がした。煩惱を起す種のない此の絶海の孤島こそ、自分に取つて唯一の淨土ではあるまいか。康頼や成經が傍にゐた爲に、都の生活に對する、否、人生に對する執著が切れなかつたのだ。此の島を假の住處（すみか）と思へばこそ、硫黃が岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くもの〻やうに懶く思はれたのだ。此處こそつひの住處だ、あらゆる煩惱と執著とを斷つて、眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、彼は生れ變つたやうな朗かな氣持がした。

彼はふと寢返りを打つと、すぐ自分の鼻先に、撫子に似た眞赤な花が咲いて居るのを見た。それは都人の彼には名も知れない花だつた。が、其の花の眞紅の花瓣が、何と言ふ美しさと淨らかさと

むげに
踊躍
紺碧の潮
琥珀色　琥珀は寶石の一種。太古針葉樹の樹脂の、土中に埋れて石となりしもの。色は多く黃色。或は赤・褐色を帶ぶ。

を持つてゐたことだらう。其の花をぢつと見詰めて居ると、人間のすべてから知られないで、美しく薫つて居る、かうした名も知れない花の生活と言つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は自殺しようとした自分の心のあさはかさを恥ぢた。彼の心には今新しい力が涌いた。彼は踊躍してたち上つた。そして、海岸へ出た。平素は魂も眩むやうに懶く思はれた大洋が、如何に美しく輝いてゐたことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が、後から〱と涌くやうに躍つてゐた。海に接して居る砂濱は金色に輝き、飛び交うて居る信天翁の翼からは、銀の光を發するかと疑はれ、平素は見る事を厭つてゐた硫黃が岳に立つ煙さへ、すみ渡つた朝空に、琥珀色に優にやさしくたなびいてゐた。彼は童のやうに伸びやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら、自分の小屋へ馳せ戻つた。

島に來て以來一年の間、彼の生活は、成經や康頼と、昔物語から謀反の話をして、おしまひにはお互の境遇を歎き合ふか、でなければ、砂丘の上などに登りながら、浪路遙かな都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのだつたが、彼はさうした生活を根本から改めようと決心した。

（菊池寛―俊寛）

こはいかに、罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓の網に漏れて、沈み果てなむ事は如何に。この程は三人一處に有りつるだに、さもおそろしくすさまじき荒磯島に、たゞ一人離れて海士の捨草の波の藻屑のよるべもなくて、あられむものか、淺ましや。歎くにかひも渚の千鳥泣くばかりなる有樣かな。

（謠曲「俊寛」）

有王 俊寛の召使たりし者。
二人 丹波少將藤原成經。平判官康頼。
今一人 俊寛のこと。
不愍にして フビンにして。可愛がつて。
六波羅 京都市賀茂川の東。五條七條の間。平家の一門の邸ありし所。

二 有王島下り

さるほどに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の稚うより不愍にして召使はれける童あり、名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行向つて見けれども、我が主は見え給はず。「如何に。」と問へば、「それはなほ罪深しとて一人島に殘されぬ。」と聞いて心憂しなども愚なり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞出さゞりければ、僧都の御女の忍うでおはしける處へ參りて、「この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は如何にもして彼の島へ渡つて、御行方をも尋ね參らせばやと存

姫御前 ヒメゴゼ。
唐船 モロコシブネ。支那と通商する船。
薩摩潟 薩摩(鹿兒島縣)南方の海洋。
法勝寺 ホフシヨウジ。京都市岡崎にありし天台宗の寺。
執行 シユギヤウ。寺社にある役僧。上首として諸務を執行す。

じ候。御文賜はつて候はむ。」と申しければ、姫御前なのめならずに悅び、やがて書いてぞ賜びてける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけむ、三月の末に都を立つて、多くの波路を凌ぎつつ薩摩潟へぞ下りける。薩摩より彼の島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、著たる物を剝取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじと元結の中には隱しける。

さて商人船に乘つて、件の島へ渡つて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人はあれども、言ふ詞をも聞知らず。有王、島の者に行向つて、「物申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。」と

いさとよ

白雲云々
和漢朗詠集、紀齊名の作に、「山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢。」とあるによる。

沙頭云々
和漢朗詠集、大江朝綱の作に、「沙頭刻印鷗遊處。水底模書雁度時。」とあるによる。

問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振りて「知らぬ。」といふ。その中に或者が心得て、「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、あそこゝと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず。」とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋んで往來の道もさだかならず。晴嵐夢を破つては、その面影も見えざりけり。山にては遂に尋ねも遇はず、海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。

俊寛と有王

蜻蛉
カゲロフ。昆蟲類中の蜻蛉科に屬す。トンボに似て形小し。

繼目
關節のこと。

ゆたひ
肉が落ちて皮のたるむこと。

乞丐人
キツガイニン。乞食。

ある朝、磯の方より蜻蛉なんどの如くに瘦衰へたる者、よろぼひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髮は空樣に生ひあがり、萬の藻屑取りつけて、荊棘を戴いたるが如し。繼目あらはれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹布のわきも見えず、片手には荒海布を持ち、片手には魚をもらうて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろ〳〵として出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。

はや、かれもこれも次第に歩み近づく。若しかやうの者にても我が主の御行方や知つたると、「物申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給

波路を淩ぐ

神妙

ふべきなれば、「これこそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄てゝ、沙の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知つてけれ。

僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上にかき乘せ奉り、「多くの波路を淩ぎつゝ、遙々これまで尋ね參りたるかひもなく、如何に、やがて憂目を見せむとはせさせ給ひ候ぞ。」と、さめ〴〵とかき口說きければ、僧都少しく人心地出で來、扶け起され、「誠に汝、多くの波路を淩ぎつゝ、遙々とこれまで參つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮れても、都の事のみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影を夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたう疲れ弱つて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たるをもたゞ夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。」有王、「こは現

去年　治承二年。

少將　成經を指す。

判官入道　康賴を指す。

九國　九州。

にて候なり。さてもこの御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。」と申しければ、「いさとよ、これは去年少將や判官入道が迎への時、その瀨に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の、『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚に若しやと賴みつゝ、永らへむとはせしかども、此の島には人の食物も絕えてなき處なれば、身に力のありしほどは、山に登つて硫黃といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず、かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人・釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。これにて何事をもいはゞやとは思へども、いざ、我が家へ。」と宣へば、有王あの御有樣にても家を

より竹　波に漂ひて濱邊に漂ひ來れる竹。
西八條　清盛の邸をさす。
官人　クワンニン。檢非違使廳の役人。
追捕　ツヰブ。官に沒收すること。
北の方　貴人の妻。こゝにては俊寬の妻をさす。
鞍馬　京都府愛宕郡。京都市の北方。

持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け參らせ、教に從ひて行くほどに、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆をゆひて桁・梁に渡し、上にも下にも、松の葉ひしと取懸けたれば雨風溜るべうも見えざりけり。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、「去年少將や判官入道迎への時も、これらが文といふ事もなし。今又、汝が便りにもかくとも言はざりけりな。」と宣へば、有王涙に咽びうつ伏して、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて起上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參りて資財・雜具を追捕し、御內の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隱しかね參らせ給ひて、鞍馬の奧に忍うで御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々參りて御宮仕仕り候なれ。い

瘡　モガサ。天然痘のこと。

づれも御歎の愚なる方は候はねども、中にも稚き人は、餘りに戀ひ參らせ給ひて、參り候度毎に、『如何に有王よ。我を鬼界が島とかやへ具して參れ。』と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、瘡と申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は、其の御歎と申し、又此の御事と申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姬御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍うでおはしけれ。それより御文賜はつて參りて候。」とて、取出でて奉る。僧都これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奧には、「などや三人流されおはします人の、二人は召還されて候に、何とて一人殘されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身ほどいふかひなきことは候はず。男の身にて候はゞ、

はかなさ　とりとめのなきこと。
人にも見え　人の妻となること。
人の親云々　後撰集、藤原兼輔の作に、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな。」とあるによる。
蟬の聲云々　和漢朗詠集、李嘉祐の作に、「千峯鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋。」とあるによる。麥秋は陰暦四月をいふ。
白月・黑月　ビヤクゲツ・コクゲツ。白月は滿月。黑月は晦の月。

渡らせ給ふ島へも、などか尋ね參らで候べき。この童を御供にて急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。この子が文の書きやうのはかなさよ。「これ見よ、有王よ。」と書きたることのうらめしさよ。俊寛が心にまかせたるうき身ならば、何とて此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これほどにはかなくては、いかでか人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべきか。」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。「この島へ流されて後は、暦もなければ月日の立つをも知らず、只自ら花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者

ごさんなれ　こそあるなれの轉。
西八條云々　治承元年、平氏討滅の謀露れ西八條の邸に召されし時のことをいふ。
契　約束事。
心苦し　氣がかりなり。
彌陀の名號　ミダのミヤウガウ。阿彌陀佛の名號。
臨終正念　リンジュウシヤウネン。命の終るに臨んで、心亂れず正しき意。
後世　ゴセ。あの世。來世。

も、はや先立ちけるごさんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かむと慕ひしを、やがて還らむずるぞと慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りとだにも思はましかば、今暫くもなどか見ざらむ。親となり子となる、夫婦の緣を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身なれば、歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて、おのれに憂き目を見せむも、我が身ながらつれなかるべし。」とて食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡つて二十三日と申すに、僧都庵の中にて遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王、空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、「やがて後世の御供仕るべう候へども、この世には姫御

前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ參らすべき人も候はず。しばしながらへて御菩提を弔ひ參らすべし。」とて、ふしどを改め、庵を切りかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取りかけて、藻鹽の煙と爲し奉り、茶毗事をへぬれば、白骨を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて九國の地にぞ著きにける。

それより僧都の御女の忍うでおはしける御許に參つて、ありし樣を始めより細々と語り申す。「なかなか文を御覽じてこそ、いとど御思は增らせ給ひて候しか。件の島には硯も紙もなければ、御返事にも及ばず、思し召されつる御事どもは、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき。たゞ如何にもして御菩提を弔ひ參らせ給へ。」と申しければ、姫御前聞きもあへ給は

菩提　ボダイ。Bodhi 正覺と譯す。

茶毗　ダビ。Jhapita 火葬のこと。

他生　今生に對し、今生以外の他の世界をいふ。

曠劫　クワウゴウ。きはめて長き時間。

ず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納め、法師になりて、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。

（平家物語）

心のほかなることありて知らぬ國に侍りける時よめる　　平康頼

かくばかりうき身の程も忘られてなほ戀しきは都なりけり

薩摩潟沖の小島に吾はありと親には告げよ八重のしほ風

（千載和歌集）

法華寺　奈良市法華寺町にある眞言律宗の寺。

七道　東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。

平家物語　流布本は十二卷なれど、異本多くして卷數一定せず。平氏の勃興より滅亡に至るまでを敍述す。作者未詳。

博雅　源博雅。醍醐天皇の孫克明親王の子。管絃に巧なり。天元三年歿。年六十三。(一五七八—一六四〇)

三位　博雅は從三位に至りしによる。

直衣　ナホシ。古の貴人の通常服。

朱雀門　京都御所の南面にありし大門の名。

いかつい　いかめしい。

らうたげ　愛らしい。

一三　笛を合はす人

昔博雅といふ三位が居た。月の美しい晩に、直衣袴で、朱雀門のあたりに笛を吹きながら、殆ど終夜歩いて居た。笛の冴えるのと、月の澄むのと、自ら競ひながら次第に深く更け、輝くやうな晩であつた。博雅は己の影を愛した。——影もなほ横笛に右三本の指を空にはね、目立たぬ腰刀のいかつい影もなかつたからである。

——朱雀門を離れると、築地の蔭を冷えるにまかせてゐる彼の額に、らうたげな月が西の端へかゝつて居た。

其の時、博雅はふりかへつて見ると、後からも一人の三位装束の直衣姿が、同じ笛聲を齎らしながら、月の落ちてゆく方を向いて歩いてゐるのを見た。音色は己のに增して美しく、高低はたゞなら

自負

慊焉　ケンエン。あきたらず思ふさま。

瞬間

託つ　カコつ。

ぬ和らかみをもつて居た。ひとつは博雅は今の世に己一人のみが笛吹きといふ自信と、成方以來の奥義を心得てゐるものであることを自負してゐた爲に、其の笛の音色に自ら慊焉として脣の動きがすゝまなかつた。しかしさういふ輕い興奮のやんだ瞬間には、まう平生の笛聲を吹きならすことが出來、同じ月の落ちてゆく方へ何れが形とも影ともわからぬやうに歩いて居た。月の落ちてゆくのを惜しむには、二人とも同じ良夜の短いことを託つて居たのである。

博雅はものをも言はずに、唯その人の後へ尾いて行くやうな位置に、何時の間にか置かれて居た。笛を合はすにも、彼は臆病と注意とに汗をかいて居た。博雅の心には、其の人の笛は、此の世のものでないやうにさへ、美しい翼ある冴えをもつて聞えたのである。

一揖

彼等は毎夜のやうに笛を合はした。そして互に物もいはずに別れた。月のない晩は、博雅は自家にあつて、やはり月とさうして其の人の姿とを描き、何處からか笛聲をさへ漏れきく耳のならひを感じてゐた。博雅にとつて月を仰ぎみることは、其の人を目にすると同じ支配を、何時の間にか受けて居たのである。

月の明るい晩がかへつてくると、博雅は朱雀門近くへ出て、その人の來るのを心待にして居た。其の人は、さういふ博雅の心に其の人の考へられてゐる間には、後か或は前かに笛を持つて現れてゐた。博雅の心からも其の人が分れ出て來るやうに、それほど其の人は博雅の側近くに居た。ある夜博雅は其の人に言葉をかけ、慇懃に一揖を試みた。

「あなたの笛を若し私に貸していたゞけるなら。さういふ私の

恭愼

羞恥　シウチ。

願は卑しいものでせうか」

恭愼と羞恥とで、博雅は、其の人を仰いで、朱塗りの横笛をちらりと目にいれた。

「御望ならば、どうかお手にせられたい。そのかはり御身のものを御貸しくださるやうに。」

彼等は、かうして月下に、その笛を互に右と左とに分つた。博雅は、その笛を押し戴いて、耳もとに六孔を觸れてきいた。孔は透つて靜かな餘韻を傳へ、且つ寂しく匂ふやうに思はれた。博雅はそれを上脣にあてると、呼吸が輕いほど吹きよい古さと枯れと、その上指あたりは滑かな肌をして居た。彼等は、其の月の下を、かうして互に競ひながら吹きあそんで居た。そして別れる時に、笛を互に元通りに、博雅のものは博雅に、その人のものはその人に返した。

宇治殿　藤原賴通をさす。

其の翌晩から、彼等は、決つて笛を分ちながら吹いてゐたが、ある晩其の人は不思議に姿を見せなかつた。博雅は、己の影にまで驚いて、隈なくあたりを探したが、やはり姿はなかつた。單にその晩ばかりではない、それからずつとその人は來なかつた。博雅は、その笛のことが氣にかゝつてゐたが、何時の間にか己の笛のやうな氣がしてしまつた。それから幾年經つても、其の人の影をも見ることは出來なかつた。

數年の後に博雅が死んでから、其の笛は、時の宇治殿にをさめられたが、誰一人吹く者もなかつた。その笛には葉二つあつて、一枚は朱く一枚は青かつた。青いのに朝ごとに露が置くといはれて居た。

その後淨藏といふ名高い笛吹きがゐた。その音色は、皇帝亂旋・

淨藏　平安朝中期の人。

師子荒序の四つの祕曲はもとより萬秋樂の五六帖にも秀でてゐた。博雅以來、淨藏の右に出るものすらなかつた。

淨藏は、博雅の笛を、朱雀門のほとりで吹くことを願ひ出て、それが許された。なぜといふに、必ず美しいさきの月夜の續きを見ることに、人々は期待したからである。

或良夜淨藏は三位直衣で、靜かな朱雀門の夜更けを、鳴るにまかせた笛を、己が心のまゝに吹きすさんで居た。淨藏には、このやうによく鳴る笛の經驗はなかつた。彼は星白く月にかはつて光る朝まだきまで、殆ど己を忘れて歩いてゐた。置く露で己の姿も濡れてゐた。人々は其の笛の美しいのを讚め稱へたのである。

翌朝その笛を納めに出た時、淨藏は顏色蒼然としてゐた。それは、二枚あつた葉の青く綠したのは枯れ、朱い方の葉は落ち、そして

けはひ

室生犀星　名は照道。小説家。詩人。石川縣の人。明治二十二年生。

どちらにも露の置くけはひさへなかつたからである。

（室生犀星の文による）

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらむ。

（鴨長明—方丈記）

あらたまの云々　あらたまは年にかゝる枕詞。養和元年（一八四一）安德天皇の御代の事なり。

一萬　曾我十郎祐成の童名。

箱王　曾我五郎時致の童名。

母　名は滿江。祐泰の死後、曾我祐信に再嫁す。

曾我殿　曾我太郎祐信。

工藤一﨟　工藤祐經。

鎌倉殿　源賴朝。

きり者

一三　空ゆく雁

あらたまの年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つになりにける。ある夕暮、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづこにおはしますぞや。その佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりに思はれて、母泣く〳〵宣ひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と心強く語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前はまことやらむ、『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一﨟とやらむに射られて死に給ひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時

この里 神奈川縣足柄下郡曾我中村。
おとなし
人倫 こゝでは人類といふ意。
河津殿 河津三郎祐泰。工藤祐經の臣下に討たる。

もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。 我等をも殺さむとや思ふらむ。 我等がこの里に在りと知らでや過ぐらむ。」などおとなしく語りければ、母よりはじめて女房達まで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶ翼も、皆別の翼ぞ交へざりける。 五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。 物いはぬ鳥類すらかくの如し。 我等は人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。 我等が父をば河津殿と申してありきとかや。 父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありき

こざかし
乳母 メノト。
遠侍 古昔、武士の家にて主殿より遠く離れて、中門の際などに設けたる番所。

なむ。 我等より幼き者にても、馬・鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨しさよ。 これらの事ども思ひ續くれば、いつより今宵は、父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顏を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顏を合はせて泣きゐたり。 一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。 いかに和上臈達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。 とく〳〵入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄刻の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經を

領掌

曾我物語　十巻又は十二巻。曾我兄弟の復讐の顛末を記せる物語。作者未詳。

かくの如く刺合ひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと、人々思ひけり。

（異本曾我物語による）

元日や家にゆづりの太刀佩かん　去來

埋火や夜學にあぶるたなごころ　白雄

冬ごもり史記讀むほどは米もあり　闌更

鶯や茶の木ばたけの朝月夜　丈草

シテ（仕手）曲中の主役。

アド　相手役。

名譽　評判の好きこと。有名。

一四　膏藥煉

二人　シテ　男　半袴、上下、腰帯
　　　アド　男　出立同前

アド　まかり出でたる者は、鎌倉方の膏藥煉でござる。某ほど天下に膏藥の名譽なるはあるまいと思ふ處に、聞けば都にも、名譽の膏藥があると申す程に、この度都へ上り、膏藥を煉比べて見ようと存ずる。まづそろり〳〵上らう。（道行）やれ〳〵今日は天氣も好し。この様な仕合はない。やあ、殊の外寂しい。道連もない。この所に待つて、よからう連も參つたら、同道致さうと存ずる。

シテ　これは都に隱れもない膏藥煉でござる。某ほど膏藥の上手はあるまいと存ずる處に、聞けば鎌倉方にも名譽の膏藥があると

海道　沿海の地方に通ずる街道。こゝでは單に街道の意。

わごりよ　親しみて呼ぶ對象の代名詞。おまへ。

申す。この度鎌倉へ下り、膏藥を吸合はせて見ようと存ずる。先づそろり〳〵參らう。（道行）今日は道連もなうて寂しうござる。

アド　やあ、いかう松脂臭うなつた。何事ぢや知らぬ。やあ、此處なものは、この廣い海道を、なぜに行當る。

シテ　いや、そちが當つた。

アド　何と、其方は、どれから何處へ行く。

シテ　身共は、ちと用事あつて鎌倉へ行くが、そちは何處へ行く人ぞ。

アド　身共は鎌倉方の膏藥煉ぢやが、身共ほどの膏藥の上手はあるまいと思ふところに、聞けば、都にも、膏藥の上手があると申すによつて、煉比べて見ようと思うて上るところでをりやる。

シテ　扨は鎌倉の膏藥煉とはわごりよが事か。身共は其方が云ふごとく、鎌倉の膏藥煉の事、聞及うで、只今鎌倉へ下る處でをりやる。

芥子粒　ケシツブ。芥子の種子。轉じて極めて微細なるものを譬へていふ。

アド　扨はさやうでをりやるか。何と某の膏藥には系圖があるが、わごりよの膏藥にも系圖があるか。

シテ　なるほど此方にもある。其方から語つて聞かしやれ。

アド　心得た。語らう。よう聞かしませ。

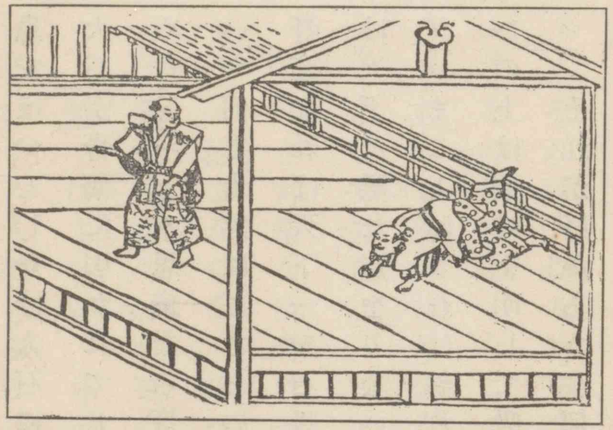
（語）さても昔、頼朝の御代に、生食、摺墨といふ名馬をせめさせられしに、何としてかこの生食が、虚空をさしてとつて出た時に、御前なりし諸大名、やれ、あれを止めよ〳〵と仰せられたれども、誰あつて止むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父罷出で、あの馬を、この膏藥にて、止めて御目にかけませうと申した。頼朝をはじめ諸大名、何として膏藥で止められうぞと仰せられ、一度にどつと笑はせられた。さりながら、止めさへするなら、止めさせいと仰せ出された。畏まつて候と、先祖の祖父罷出で、膏藥を指の腹に芥子粒程

つけ、息をほつとしかけ、かの駈ける馬に向つて、あの馬吸へ〳〵と申したれば、何が膏藥の强いに引かれて、駈出でたる馬が、じたじたじつと吸寄せられた。その時、賴朝を始め、御前なる人々、さてもさても名譽なる事かな、何と、その膏藥には銘があるかと仰せられた。いや〳〵、何も銘はござらぬ。只物を吸ふによつて、吸膏藥とばかり申しまする由、申上ぐる。賴朝聞し召し、かほどの膏藥に銘が無うてはなるまい、銘を取らせうとあつて、馬を吸うたる膏藥なれば、鎌倉一の馬吸膏藥と下されてよりこの方、某が膏藥は鎌倉に隱れはをりない。

シテ　これも餘程の系圖ぢや。さらば身共が系圖を語つて聞かさう。よう聞かしめ。

アド　心得た。

シテ　抑も、平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石になる石を都の北山より、三千人して引いて參り、やう〳〵北の門まで引寄せたれども、御門より內へ入るゝ事がならなんだ。その時、某が先祖の祖父罷出で、あの石を直したう思し召さば、處をさいて仰せつけられ、膏藥にて吸寄せて御目にかけうと申した。その時淨海はじめ御前の人人、さても〳〵大きな事をいふものかなと、一度にどつと笑はせられた。さりながら、直すならば、いひ付け直させ、直さぬに於ては、曲事にいひ付けると、仰せ出された。その時



膏藥煉の舞臺

淨海　平淸盛の法名。

曲事　クセゴト。處罰のこと。

透頂香　トウチンカウ。元の歸化人陳宗敬の傳へし痰の藥。

先祖の祖父、畏まつて罷出で、かの膏藥を透頂香ほど指の腹につけ、息をほつとしかけ、大石に向ひ、あの石吸へ〳〵と云ひければ、かの大石が膏藥に引かれて、じり〳〵じつと吸寄せられた。淨海はじめ各〻さても不思議なる膏藥かな、何と銘があるかと問はせられた。いや何とも銘はござらぬ。吸膏藥と申上げければ、かほど名譽の膏藥なれば、天下一の石吸膏藥と下されてよりこの方、身共の膏藥は、天下に隱れがをりない。

アド　まことにこれは、餘程の系圖ぢや。互に劣らぬ事ぢや。いざこの上は、藥味を明して、吸ひあはせて見ようか。

シテ　それが好からう。何とわごりよが藥味は、何々が入るぞ。

アド　されば身共の藥味は、むづかしい物が、なか〳〵入る。まづ地を走る雷、空を飛ぶ胴龜、木に生つた蛤、この樣な物が入るわ。

シテ　それはむづかしい物ぢや。身共が藥味も、いろ〳〵大切な物が入る。白鳥、赤犬の生膽、三足の蛙、このやうなものが入るわ。

アド　それは大切な物ぢや。今などはあるまいが、何とおしやる。

シテ　その事ぢや。今この藥味は求むる事がならぬ。先祖の祖父より求めて置かれたを、只今まで少しづつ惜しみ使ひにするわ。

アド　さうであらう。

シテ　いざ膏藥を吸合はせて見ようか。

アド　一段よからう。拵へさしませ。

シテ　鼻の先につけて、吸合はせう。何と、よいか〳〵。

アド　拵へはよいぞ。さらばちと鎌倉へ引かうぞ。

シテ　いや〳〵、引く事はなるまいぞ。さても〳〵強い膏藥ぢや。さらば、ちと都方へ引かうぞ。

アド　いや〳〵、都へはなるまいぞ。これは何とするぞ。さてもさても強い膏薬ぢや。これから鎌倉へ、一引に引いてくれうず。

シテ　いや〳〵、なるまいぞなるまいぞ。さても〳〵、これも強い膏薬ぢや。それなら都方へ一引に引かうぞ。やあ〳〵〳〵。

アド　これはならぬぞ〳〵。何とするぞ〳〵。

シテ　そりや引きこかした。さあ〳〵、勝つたぞ〳〵。

アド　いや〳〵、今のでは知れぬぞ。も一度勝負をせい。やるまいぞやるまいぞ。

（續狂言記）

蒼鷹の人を見こなして、眼の内に、あらゝかなる才智をそなへたる、いと憎し。されど一藝に名あるものは、世の人それをゆるしもしつべし。

（支考―百鳥譜）

傳說

史實　歷史的事實をいふ。

一五　傳說

私は茲に「傳說」といふものに對する私どもの考を明かにして見たいと思ふ。

「これは傳說だ。史實ではない。」と言つて、世間には往々傳說の名をば虛說の別名のやうに扱ひ、すべて信ずべからざる話を傳說と言つて片づける癖がある。併し「これは傳說だ。信じてはいけない。」といふやうな考は、明かに傳說と史說との混同である。少くとも、史說の立場から傳說を見るから、そんな結論になるのである。併し、この二つは、固より違つた立場から眺めらるべきもので、決して並べて一つ立場から見てはならないのである。今まで、それに氣がつかずに、傳說を史說になずらへてばかり見る癖があつたか

史料　歴史の材料。
反古　ホゴ。
謬見
獨自の領土
傳承
個人的事實

ら、傳説が無力になつてゐたのである。史料としては、傳説は破れた一片の古文書の反古にも及ばないかも知れない。併し、さういふ謬見を捨てゝ、傳説本來の面目へ立返つて見直せば、自ら傳説にも獨自の領土があつて、立派な世界が其處に開けてゐるのである。決して、無理に歴史の畠へ引入れて、その不備呼ばはりをするばかりが能事ではない。

然らば、傳説の本領は何處にあるか。傳説とは即ち傳承されてゐる説話である。內容は神怪不可思議のことであらうと、歴史的人物のことであらうと、民間信仰のことであらうと。

それ故に、傳説は、言語と同樣に、傳承の上の存在である。この傳承されてゐるといふ事が、その特徴であり、特殊の價値である。即ち、傳説は傳承の上に存在する。

故に、まづ個人的事實ではなく、多

普遍性　ひろくゆきわたる性質をいふ。
民衆的事實

數者の上の事實である。民衆的、社會的存在である。即ち、普遍性を帶びた、全國的存在なのである。この點で、傳説は歴史や小説と全く違ふ。小説や歴史には、個人の著者が存在する。併し、傳説には、著者といふやうな個人の力が、何等著しく關與してゐない。尤も、個體を離れて全體はないのであるから、何れは個人を通じて民衆的事實に現れるのであるけれども、その存立は民衆がこれを傳承して行く事實に據るのである。藝術上の作品や、歴史上の著書は固定した靜的なものだが、傳説は流動的なもので、不斷の變遷發達をしてゐるものである。それ故に作者があるとすれば、代々の民衆全體がその作者なのである。この際、個人の力は、やはり非常に小さいもので、若し個人が勝手に變改するならば、多數者の傳へに異るの故を以て、採用されずに打捨てられてしまふ。又、若し個

荒唐無稽　根據がなくとりとめのなき言葉。
天眞爛漫
巧緻

人の變改が偶〻採用されて行くとすれば、それはやはり多數の心に共鳴し、多數の人に傳承された結果なので、多數者が顧みなかつたら、やはりその變改はそのまゝ廢れてしまふ。それ故に何れにしても、傳說には多數民衆の力が働いてゐるのである。

既に多數民衆の產物である。それ故に、傳說は、一個の天才の書いた文學のやうな絢爛な光彩はない。又、卓越した史家の書いた史說のやうな精確さ整然さもない。否、屢〻荒唐無稽で、有り得べからざることが、平然として物語られてゐるのである。その代り、天眞爛漫で、飾氣もなく、巧緻も意圖もない。しかもさういふ荒唐無稽の事を傳へながら、なほその傳承者はそれを眞實の事と考へてゐる。それが傳說の原則である。なぜなら、民衆の肯んじないやうな事なら捨てられる。民衆の信じないやうな事なら閑却され

口碑　いひつたへ。

る。有り得ることゝ思ふから興味がある。興味があるから忘れられずに傳へられて行く。尤もだと思ふから共鳴する。共鳴するから傳へて行く。これが原則である。故に傳承されてゐる說話、卽ち傳說といふものは、尤もと思はれた事、有り得ると信じられた事なのである。

田舍の傳說、殊に未開の人々の間に傳承される口碑には、實に荒唐無稽なのが多い。それでも、田舍の人や未開の人々の知識感情には、信じられ、共鳴されて來たので、只現代の我等の心には、有りさうもなく感じられるだけのことである。昔から、かういふ事は何時もあつたらうと思ふ。今後も永遠に續くであらう。そして、信じられぬものは忘れられ、共鳴されるものは傳はつて、結局、かうした時代々々の小變化を受けつゝ、それでも猶組織立てられ、合理化

パンテオン　Pantheon　八百萬の神々の意。

國家結聚時代

されて、傳承され、發展させられて行くであらう。故に一種族の傳說は、その種族の生活を厭でも反映させる。水草を追うて遊牧の生活をしてゐる者の間に、統一ある神界を物語る神話はない。只雜然たる片々たる傳承のみがある。希臘神話のパンテオンは、卽ち希臘社會組織の反映である。我が國でも、國家結聚時代に入つた奈良朝の神話に、數多の傳承が統一整理されて、神々に系統的關係が結ばれたのも當然のことである。

ちやうど、舟が丸木舟から帆かけ舟、更に蒸汽船と進化するにつれて、自ら「ふね」といふ語の意義が變化して來るやうに、又、神の觀念の發達につれて、神といふ語の意義が進化をして來るやうに、傳說も亦時代から時代へ傳承される間に、不斷に時勢を刻印し、また時代を反映しながら、傳へられるのである。かうして、傳說は幾ら荒唐無稽に見えても、傳承される社會には信じられてゐるから、存在するのである。こゝが傳說の大切な處で、これあるがために、傳說がその獨自の領土を保つのである。

客觀的事實

主觀的事實

資料　材料のこと。

金田一京助　言語學者。東京帝國大學助教授。岩手縣の人。明治十五年生。

卽ち、傳說が物語るやうな事實は、假令實際にあつた客觀的事實ではないにしても、少くとも傳へてゐる人々に取つては、主觀的事實なのである。換言すれば、歷史的事實ではなくて、思想的事實なのである。日附のない事實、信仰の事實である。故に、歷史の資料としては無價値であらうとも、思想・信仰の實際を見る資料としては、一向に差支ないのみならず、この上もない貴重な資料である。種族性とか、國民精神とか、その形のない內的生活をば、さながら外的生活に於ける寫眞のやうに、鮮かに豐麗にその眞相を展開するのが傳說である。

（金田一京助―アイヌの研究による）

木曾　源義仲をいふ。義賢の子。武將。壽永三年戰死。年三十一。（一一八四）

長坂　京都府葛野郡小野鄕村より同府北桑田郡（丹波の國）へ通ずる坂路。

龍華越　京都府愛宕郡大原村より滋賀縣滋賀郡伊香立村龍華へ通ずる道。

打出の濱　今の大津市の松本・石場濱あたりの古名。

六條河原　京都市六條の賀茂川原をいふ。

一六　木曾殿の最期

木曾は長坂を經て丹波路へとも聞ゆ。龍華越にかゝつて、また北國へとも聞えけり。かゝりしかども、今井が行方のおぼつかなさに、取つて返して、勢多の方へぞ落行き給ふ。今井四郎兼平も、八百餘騎にて勢多を固めたりけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば捲かせて持たせつゝ、主（しゅう）の行方のおぼつかなさに、都の方へ上るほどに、大津の打出の濱にて、木曾殿に行逢ひ奉る。中一町ばかりより互にそれと見知つて、主從駒を早めて寄り合うたり。

木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるは、「義仲、六條河原にて如何にもなるべかりしかども、汝が行方のおぼつかなさに、多くの敵（かたき）に後を見せて、これまで遁れたるは如何に。」とのたまへば、今井四郎、

なのめならず

「御諚まことに辱う候。兼平も勢多にて討死仕るべう候ひしかども、御行方のおぼつかなさに、これまで遁れ參つて候。」と申しければ、木曾殿「さては契は未だ朽ちせざりけり。義仲が勢、山林に馳散つて、この邊にも控へたるらむぞ。汝が旗上げさせよ。」とのたまへば、捲いて持たせたる今井が旗さし上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、また勢多より參る者ともなく、馳集つて、程なく三百騎ばかりになり給ひぬ。

木曾殿なのめならずに悅びて、「この勢にては、最後の軍、一軍など

粟津の松原

しぐろうて　密集して黒くなりてゐること。

唐綾縅　支那風の綾絲で縅せるもの。

いかもの作り　いかめしくつくりし義にして、太刀の柄・鞘ともに銀ののし付があり、筋金を入れ、柄の頭と鞘の足に銀のくさりをつけたるもの。

石打の矢　鷲・鷹等の尾を左右に擴げて左右共に第一・第二の羽で矧ぎたる矢。

かせざるべき。あれにしぐろうて見ゆるは、誰が手やらむ。」「甲斐の一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。」「勢はいかほどあるらむ。」「六千餘騎と聞え候。」「さては互によい敵同じう死ぬるとも、大勢の中に驅入り、よい敵に逢うてこそ討死をもせめ。」とて眞先にぞ進み給ふ。

木曾殿その日の裝束には、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧著て、いかもの作りの太刀を佩き、鍬形打つたる兜の緒をしめ、二十四さいたる石打の矢の、その日の軍に射て、少々殘つたるを頭高に負ひなし、滋籐の弓の眞中取つて、聞ゆる木曾の鬼葦毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、鐙蹈んばり立上り、大音聲をあげて、「日ごろは聞きけむものを、木曾の冠者、今は見るらむ、左馬頭兼伊豫守、朝日將軍源義仲ぞや。甲斐の一條次郎とこそ聞け。義仲討つ

兵衛佐　頼朝を指す。

巴　中原兼遠の女。今井の妹。義仲の侍女。

て兵衛佐に見せよや。」とて、喚いて驅く。

一條次郎これを聞いて、「只今名乘るは大將軍ぞや。餘すな者ども、漏らすな若黨、討てや。」とて、大勢の中に取籠めて、われ討取らむとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ驅入り、竪樣横樣蜘蛛手・十文字に驅破つて、後へつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、こゝにては二三百騎、百四五十騎、百騎ばかりが中を驅破り〳〵行く程に、主從五騎にぞなりにける。五騎が中までも巴は討たれざりしが、その後物具脱捨て、東國の方へぞ落行きける。手塚太郎討死す。手塚別當落ちにけり。

木曾殿、今井四郎、たゞ主從二騎になつてのたまひけるは、「日頃は

著背長　大將の鎧の敬稱。

粟津の松原　滋賀縣大津市膳所町の東南方にあり。

何とも覺えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」とのたまへば、今井四郎申しけるは、「御身も未だ疲れさせ給ひ候はず、御馬も弱り候はず、何によつて一領の御著背長を俄かに重うは思し召され候べき。それは身方に續く勢が候はねば臆病でこそ、さは思し召し候らめ。兼平一騎をば、餘の武者千騎と思し召し候べし。こゝに射殘したる矢七つ八つ候へば、暫く防矢仕り候はむ。あれに見え候は、粟津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜かに御自害候へ。」とて、打つて行く程に、また新手の武者五十騎ばかり出で來る。兼平は「この御敵、暫く防ぎ參らせ候ふべし。君はあの松の中へ入らせ給へ。」と申しければ、義仲「六條河原にて、如何にもなるべかりしかども、汝と一所で如何にもなりなむ爲にこそ、多くの敵に後を見せて、これまで逃れたんなれ。所々で討たれむより、一所でこそ

水づき　轡の手綱を結びつくる所をいふ。

討死をもせめ。」とて、馬の鼻を並べて、既に驅けむとし給へば、今井四郎、急ぎ馬より飛んで下り、主の馬の水づきに取附き、涙をはら／＼と流いて「弓矢取は、年頃日頃、如何なる高名候へども、最期に不覺しぬれば、長き瑕にて候なり。御身も勞れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱つて候。いふ甲斐なき人の郎等に組落されて、討たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手にかけて、討ち奉りたりなんど申されむこと、口惜しかるべし。たゞ理を枉げて、あの松の中へ入らせ給へ。」と申しければ、木曾殿さらばとて、たゞ一騎、粟津の松原へぞ驅給ふ。

今井四郎取つて返し、五十騎ばかりが勢の中へ驅入り、鐙踏んばり立上り、大音聲を揚げて、「遠からむ者は音にも聞け、近からむ人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井四郎兼平とて、生年三十三

明間　アキマ。鎧のすきま。

あふる　鐙を動かして、馬をはやむること。

よつぴいて　よくひいての轉。

に罷り成る。さる者ありとは、鎌倉殿までも知ろしめされたるらむぞ。兼平討つて兵衛佐殿の御見參に入れよや。」とて、射殘したる八筋の矢を、さしつめ引きつめ、さん〲に射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後太刀を拔いて斬つて廻るに、面を合はする者ぞなき。たゞ「射取れや、射取れ。」とて、さしつめ引きつめ、さん〲に射けれども、鎧よければ裏かゝず、明間を射ねば手も負はず。

木曾殿はたゞ一騎、粟津の松原へ驅給ふ。頃は正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をさつと打入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども〱はたらかず。かゝりしかども今井が行方のおぼつかなさに、ふり仰ぎ給ふところを、相摸の國の住人、三浦の石田次郎爲久追つかゝり、よつぴいてひやうと放つ。木曾殿、

內兜　額面をさしていふ。

貫かつて　つらぬかれての轉。

內兜を射させ、痛手なれば兜の眞甲を馬の頭におし當てゝ、うつぶし給ふ所を、石田が郞等二人落合ひて、旣に御首をば賜はりけり。やがて首をば太刀の先に貫き、高くさしあげ、大音聲を揚げて、「この日頃、日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、三浦の石田次郞爲久が討奉るぞや。」と名乘りければ、今井四郞は軍しけるが、これを聞いて、「今は誰をかばはむとて軍をばすべき。これ見給へ、東國の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本よ。」とて、太刀のきつさきを口に含み、馬より逆樣に飛落ち、貫かつてぞ失せにける。

（平家物語）

粟津の森とかや聞きて、木曾義仲の討取られ給ひけむ昔をさへ思ひやらる。今井が塚とて松一もと見ゆ。さるとぢめに至るまで、心を變へずして共に亡びけむ、ものゝふの本意なるべし。君を諫めて正しき道に赴かしむるはなほいと難きわざにこそ。（井上通女―歸家日記）

一七　鉢の木

シテ　佐野源左衞門常世
ツレ　同　妻
ワキ　旅僧。實は最明寺時賴
ツレ　時賴家臣
狂言　右の從者

ワキ次第　ゆくへ定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。

ワキ　これは一處不住の沙門にて候。我、この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候ほどに、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

道行　信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに著きにけり。

ワキ　急ぎ候ほどに、上野國佐野の渡りに著きて候。あら笑止や、又雪の降り來りて候。いかにこの屋の内に案内申し候。

ツレ　誰にてわたり候ぞ。

ワキ　これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

ツレ　易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。

ワキ　さらば御歸りまでこれに待ち申さうずるにて候。

ツレ　それはともかくもにて候。妾は外面へ出で迎ひ、この由を申さばやと思ひ候。

シテ　あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らむ。それ雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を著て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴

鉢の木　盆栽。

沙門　シャモン。Sramana の音譯。僧侶の意。

信濃なる云々　伊勢物語に、「信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠方人の見やはとがめぬ。」とあるによる。

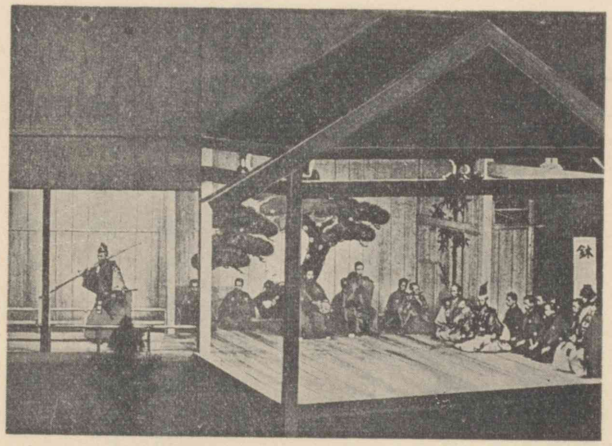
大井山・友の里・離れ坂・碓氷川・板鼻　共に信濃（長野縣）より碓氷峠を經て高崎（群馬縣）に至るまでの地名。

佐野　群馬縣群馬郡佐野村ならんといはる。高崎市の東南。昔は舟橋を架く。

雪は鵞毛に云々　和漢朗詠集に、「雪似二鵞毛一飛散亂、人被二鶴氅一立徘徊。」とあるによる。

細布衣 陸奥の希婦（けふ）の里の名產。

氅を著て、立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥のけふの寒さを如何にせむ。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや、この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。



鉢の木

ツレ さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、これまで參りて候。

シテ さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ あれに御入り候。

ワキ 我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘じて候ほどに、一夜の宿を御

山本の里 今の群馬縣群馬郡八幡村あたり。

曲もなや

貸し候へ。

シテ 易き御事にて候へども、餘りに見苦しく候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。

ワキ いや〳〵、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。

シテ とめ申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか〳〵御宿は思ひもよらぬ事にて候。これより十八町あなたに、山本の里とてよき泊りの候。日も暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ さてはしかと御貸しあるまじいにて候か。

シテ 御痛はしくは存じ候へども、御宿は參らせ難う候。

ワキ あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。

戒行

値遇

駒とめて云々　新古今集、藤原定家の歌。

三輪が崎云々　萬葉集に、「苦しくも降りくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに。」とあるによる。三輪が崎は奈良縣三輪山の西南麓。

ツレ　淺ましや、我等、かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を參らさせ給ひ候へ。

シテ　さやうに思し召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いやこの大雪に遠くは御出で候まじ。某追つ付き止め申し候べし。なうなう旅人、御宿參らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一處に佇みて、袖なる雪を打拂ひ〳〵し給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り。

地　これは東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はむより、見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。歌　げにこれも旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭の宿りも、この世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、これは雪の軒舊りて、憂き寢ながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。

シテ　いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參らせうずる物もなく候はいかに。

ツレ　折節これに粟の飯の候ほどに、苦しからずば參らせられ候へ。

シテ　さらばその由申し候べし。いかに申し候。御宿をば參らせて候へども、參らせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦しからずば聞し召され候へ。

ワキ　それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。

シテ　なう、聞し召されうずると仰せ候。急いで參らせ候へ。

ツレ　心得申し候。

盧生　唐の開元中蜀の國の盧生といふものが、邯鄲の市にて道士呂翁の枕を借りて眠り、人世五十年の榮華を夢に見しが、そは僅かに主人が黄粱を炊ぐ間に過ぎざりしといふ故事。

シテ　總じてこの粟と申す物は、いにしへ世にありし時は、歌に詠み、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐほどぞかし。あはれやげに我もまた暫しなりともうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽ぜよ、かほどまで、地 住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。

シテ　夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べき。や、思ひいだしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ　げに〳〵鉢の木の候よ。

シテ　さん候。某、世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや〳〵木ずきも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻・松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、これを火に焚きあて申さうずるにて候。

埋木の云々　平家物語、源頼政の歌に「埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける。」とあるによる。

難行の法の薪　釋迦が修行の爲に雪山にて薪を採りなどして仙人に仕へしをいふ。

ワキ　いや〳〵、これは思ひも寄らぬ事にて候。御志は有難う候へども、自然又お事世に出で給はむ時の御慰みにて候間、なか〳〵思ひも寄らず候。

シテ　いや、とてもこの身は埋木の、花咲く世に逢はむ事、今この身にてはあひ難し。ツレ　たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、

シテ　これぞまことに難行の法の薪と思し召せ。

ツレ　しかもこのほど雪降りて、シテ　仙人に仕へし雪山の薪、ツレ　かくこそあらめ、シテ　我も身を、地　捨人の爲の鉢の木、切るると

窓の梅　和漢朗詠集、菅原淳茂の作に、「池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒。」とあるによる。

見じといふ　菅家後集に、「山里の折りかけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらむ。」とあるによる。

み垣守云々　詞花集、大中臣能宣の作に、「み垣守衞士の焚く火の夜はもえて晝は消えつゝ物をこそ思へ。」とあるによる。み垣守は御所の御垣を守護する兵士。

てもよしや惜しからじと、雪打拂ひて見れば、面白やいかにせむ。先づ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先づ先立てば、梅を切りや初むべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折りかけ垣の梅をだに、情無しと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見れば春毎に花少し遲ければ、この木やわぶると心をつくし育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。

シテ　さて松はさしもげに、

地　枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑおきし、そのかひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるも理や。切りくべて今ぞみ垣守、衞士の焚く火はお爲なり。よく寄りてあたり給へや。

ワキ　近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ　御出でにより我等も火にあたりて候。

自然の時　何か事のあつた時といふ意。

押領

沙汰　訴訟の沙汰のこと。

最明寺殿　北條時頼のこと。剃髮して最明寺入道といふ。

ワキ　いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ。承りたく候。

シテ　いや、某は名字もなき者にて候。

ワキ　何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ　この上は何をか包み候べき。これこそ佐野源左衞門尉常世がなれる果にて候。

ワキ　それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。

シテ　その事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となりて候。

ワキ　なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は候はぬぞ。

シテ　運のつくる所は、最明寺殿さへ修業に御出で候上は候。かや

著到 チヤクタウ。將士の馳せ著きし者を順序に記す帳簿をいふ。

たゞ頼め 新古今集に、「なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは。」とあるによる。

うにおちぶれては候へども、御覧候へ、これに武具一領・長刀一えだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候。これは、只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乗り、一番に馳參じ著到につき、さて合戰始まらば、（地）敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄りあひ討ちあひて、死なむこの身の、このまゝならば、徒に飢に疲れて死なむ命、なんぼう無念のことぞ。

（ワキ）よしや身の、かくては果てじたゞ頼め、われ世の中にあらむほど、又こそ參り候はめ。暇申して出づるなり。

（シテツレ）名殘惜しの御事や。はじめは包む我が宿の、さも見苦しく候へど、しばしは留り給へや。

（ワキ）とまる名殘のまゝならば、さて幾度か雪の日の、（シテツレ）空さへ寒きこの暮に、（ワキ）いづこに宿をかり衣、（シテツレ）今日ばかり留り給へや。（ワキ）名殘は宿に留れども、暇申して。（シテツレ）御出でか。

（地）さらばよ、常世。（シテツレ）また御入り。（地）自然鎌倉に御のぼりあらば御尋ねあれ、けうがる法師なり。かひ〴〵しくはなけれども、公方の緣になり申さむ。御沙汰捨てさせ給ふなと、言捨てゝ、出船のともに名殘や惜しむらむ。

けうがる

公方 クバウ。幕府をさす。

中入

東八個國 相摸・武藏・安房・上總・下總・上野・下野・常陸のこと。

中間 チユウゲン。

中入

（シテ）いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、夥しく上る。さぞあるらむ。東八個國の大名・小名、思ひ〳〵の鎌倉上り、さぞ見事にて候らむ。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀・刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替・中間きらびやかに、うち連れ〳〵のぼる中に、常世が常にかはりたる馬・物具や打

足弱車

物の、物そのものにあらざる氣色、さぞ笑ふらむ。さりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。地 急げども〳〵、弱きに弱き柳の絲、シテ 縒れに縒れたる瘦馬なれば、地 打てども煽れども、先へは進まぬ足弱車の、乘り力なければ追ひかけたり。

ワキ　いかに誰かある。

ツレ　御前に候。

ワキ　國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか。

ツレ　さん候。悉く參りて候。

ワキ　その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

仔細

ツレ　畏まつて候。いかに誰かある。

狂言　御前に候。

ツレ　君よりの御諚には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前に參れとの御ことにて候。

狂言　畏まつて候。いかに申し候。

シテ　何事に候ぞ。

狂言　上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。

シテ　何と某に參れと候や。

狂言　なか〳〵のこと。

シテ　あら思ひよらずや。これは定めて人違ひにて候べし。

狂言　いや〳〵、そなたのことにて候。その仔細は、諸軍勢の中に、い

大床 外側の緣をいふ。
綺羅星の如し

かにも見苦しき武者をつれて參れとの上意に候が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬほどに、さて申し候。急いで御參り候へ。

シテ 何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れと候や。

狂言 なか〳〵のこと。

シテ さては某にて候べし。畏まり候と御申し候へ。

狂言 心得申し候。

シテ げに〳〵これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申上げ、御前へ召出され、頭を刎ねられむためな。よし〳〵それも力なし。いでいで御前に參らむと、大床さして見渡せば、地 今度の早打に上り參れる兵、綺羅星の如く竝み居たり。さて御前には諸侍、その外數人

勢づかひ 軍勢の召集。

竝み居つゝ、目をひき指をさし、笑ひあへるその中に、シテ 横縫のちぎれたる、地 古腹卷に錆長刀、やう〳〵に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前に畏まる。

ワキ やあ、いかにあれなるは佐野源左衞門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝、佐野にて申しゝよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりともその馬に乘り、一番に馳せ參ずべきよし申しつる、言葉の末を違へずして參りたるこそ神妙なれ。まづ〳〵今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、眞か僞か知らむためなり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰致すべきところなり。まづ〳〵沙汰の始めには、常世が本領

安堵　アンド。鎌倉・室町時代に土地の所有を公認する文書をいふ。

佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合はせて三個の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵にとり添へたびければ、シテ 常世はこれを賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。始め笑ひしともがらは、これほどの御氣色、さぞ羨しかるらむ。地 さて國々の諸軍勢、みな御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。シテ その中に常世は、地 よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乘りて、上野や佐野の船橋、とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。

（謠曲）

言葉の重心

關心

寄席藝人

一八　苦言

「どうせ僕のやうな才能のない平凡な人間は、――」と君は云ふ。しかしその言葉はすなほに響かない。君は反感から、嫉妬から、それを云ふのだ。自分は平凡でありたくない。平凡であることは堪らない。しかし自分が非凡だといふ確證はどこにもない。自分はAの如き才能も、Bの如き技巧も持つてはゐない。自分のすることは何人の嘆賞にも値しない。是は口惜しく、苛立たしく、又辛い事だ。けれども――此のけれどもに君の言葉の重心がある、――けれどもAやBにした所で、どれだけ非凡な偉さがあるのだ。あんなちつぽけな才能とあんなにこせ〳〵した關心とは、非凡人の名には値しない。寄席藝人の藝と何の選ぶ所もないではない

五十歩百歩　多少の相違あれど大體は同一なりとの意。

謙讓

か。他の人に同じ事が出來ないといふだけでは、非凡とは云へない。結局我々と五十歩百歩だ。非凡人などといふものが、さう多くある譯ではない。かういふ感情が君の言葉から響いて來る。かうして君は、自分の不安を拂ひのけようとしてゐるやうだ。

　本當に自分の小さい事を悟つた人は、恐らく君のやうな言葉は口にしないだらう。彼の謙讓な心には、自然と人生との中に横たはる樣々な「偉大」が、溢れる樣に流れ込むのだ。彼は偉大なものゝ偉大さを最も深く體驗する。さうしてその偉大の内に自分を沒入しようとする。自己の凡非凡の問題は、もはや彼の心を曇らさない。自分の前に非凡なものを見ることは、彼にとつては幸福である。從つて彼は、自分の前の小さい才能や小さい非凡人が、早くから老衰してしまふことなしに、大きい才能、大きい非凡人に成長

厭嫌

して行くことを心から祈る。このやうな人は、いかに彼自身が自己の凡小を悟つてゐようとも、既にその悟りの故に非凡となつてゐるのである。

　君はあの言葉を使つた心持を、もつと反省して見なくてはいけない。自分の凡小を悟る事は、決して惡くはないが、唯それを反語として使ふ樣な心持が宜しくないと思ふ。あゝいふ響を持つた言葉は、又惡臭をも伴なつてゐるから、聞く者には堪へ難い厭嫌を催させる。けれども僕は、その臭氣が、君の内臟から出て來るのではないことを信じてゐる。さうして君がそれに氣附けば、容易に癒し得るだらうといふことをも信じてゐる。

　また君は、「先が見えてゐる。どうせ自分は、大した仕事は出來ないに極つてゐる。」と云つた。しかし君は、自己の運命に就いて、どう

獨特

してさうたやすく豫言することが出來るのか。勿論、君は自分の現在の才能や力の感じから押して、未來を算出して見たのだらう。けれども君がAやBのやうな才能を持つてゐないといふことは、どうして君が才能を持つてゐないといふ證據になるのか。君は君の知つてゐるどの人にもない樣な、君獨特の才能を持つてゐるかも知れないではないか。君はなるほど試みた。しかしそれはAやBと同じやうなことが出來るかどうかを試みたに過ぎないのだ。さういふ試みをいくら重ねても、君獨特のものが出て來るとは限らない。君はたゞ自己を培ひ、自己を成長させることによつて、君獨特のもの〻發芽するのを待たねばならぬ。そんな種は自分の内にはない、培つても駄目だ、とは誰が斷言し得るだらう。君はまだその種が發芽するやうに面倒を見てやらなかつたのだ。

僭越　センエツ。

さうして芽が出て來なければ、君は自分の内にその種があるかどうかを見きはめる事が出來ないのだ。それほど自分に對して盲目でありながら、どうして自分の未來を豫言する事が出來るのか。今までこれほど永い間培つてもまだ芽を出さない所を見ると、どうやら種はないらしい、と君は云ふかもしれない。しかし君は、こんな種があるだらう、あんな種があるだらうと、人のを見てほしくなつたものを、自分の内にも見つけ出さうとして、さういふ目的に合つた肥料をしか、自分にやらなかつたのであらう。しかもそれが僕から見ると至極貧弱だつた。さういふ事をして置いた癖に、まう手ぬかりなくやつたといふ樣な顔をしてゐるのは、自己に對して僭越過ぎる。自己の内の獨特な種を育てたいといふ意欲が弱いのだとしか思へない。君がもし自分の内に強い力を感ずる

意欲　憂愁　豫斷

事が少いとすれば、それもこの意欲の弱さから來るのであるかも知れぬ。勿論人間は、どんな強い人でも時々弱るものだ。さうして憂愁の底に沈んで自分の力の足りなさに嘆くものだ。君にその事のあるのは少しも君に力がないといふ事にはならない。しかも君は、その反對に、溢れるやうな力を自分の内に感じた事が曾てないとは言へない筈だ。たゞさういふ機會が、自分の願ふ程多くないといふだけだらう。それならば、君の意欲が強まるに從つて、力を感ずる機會が多くなることは確かだ。君はたゞ意欲すればいゝのだ。さうして良い種の芽生えて來る事を信ずればいゝのだ。僭越な早合點を土臺にして、數學的に算出でもしたやうに、自己の未來を豫斷するなどは以ての外の事だ。このやうな豫斷を、さも確かな事らしく信じてゐるといふのは、寧ろ滑稽に類する。

認識　萎縮

　君は自己の過去を省みて、重大な出來事が皆豫期以外のものであつた事を認めないか。運命の進行が、多くは自分の頭の算出した所と異つてゐた事を認めないか。頭で豫想した未來といふものは、實は過去を未來迄延長したものに過ぎぬ。眞實の未來の認識ではない。元來、未來の事は認識される筈のものではない。

　君は唯未來を意欲すべきだ。願望すべきだ。さうして信ずべきだ。僕は君が自己を信ずる事を心から祈る。此の信仰がないために、どれ程多くの人が萎縮し滅亡して行くことだらう。君がもし同じ運命に出逢ひたくないならば、自己を愛するがいゝ、愛するが故に信ずるがいゝ。これこそ自己に對する最上の善だ。

　人生と自然とは君の眼前にある。君はそこから學ぶべきだ。自分の眼を以て、自分の心臟を以て。

（和辻哲郎―偶像再興）

調節

一九　早春の賦

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢れる夏も、靜かに澄渡りつゝ鎭まり行く秋も、自然の生命が溫かに雪に籠る冬も、盛んなるにつけ、寂しいにつけ、靜かなるにつけ、悲しいにつけ、愁ひを含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢れるにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

併し、かくいふのは、余と容易に同化し難い季節と、余と最も調子の合ふ季節との差別がある事を否定する意味ではない。梅雨の美しさや、東京の冬の美しさを感ずるには、余にとつては身心の特に强健で調節せられた狀態が必要である。余の心の痛み易く感じ易い時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空と肌を襲

霜晨　サウシン。霜のおりたる朝。

生命の營

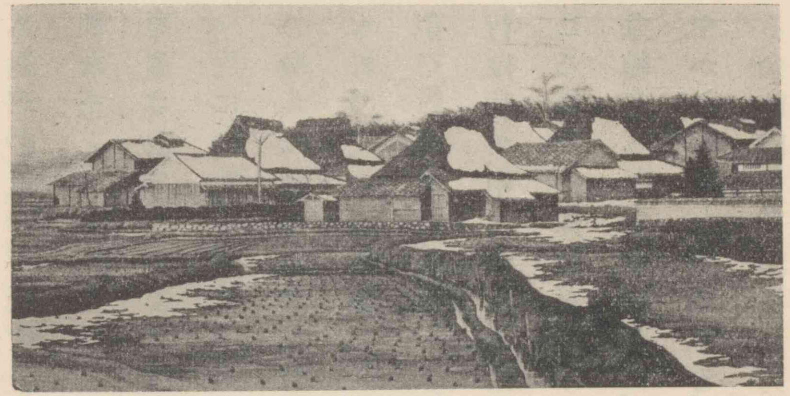
たゆたふ　迷ひて心に決せず、ぐず〱す。

ふ濕潤の氣との厭はしさによつて、凛然たる霜晨の勇しさよりも裸な土と梢を搖る風の音の烈しさとによつて、余の心は容易にかき亂される。

之に反し、一年の中最もよく余の心と調べを等しくするのは、春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも日の光の肌に親しい頃、ぬくみ始めた細流の邊に青い物の漸く芽ぐむ頃である。その時、自然の生命の營は、なほ半ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところのない伸張を續けて行く。生命の車は、いまだ全力を盡して急轉することをせずに、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩やかな廻轉を開始する。外に發するよりも內に籠ることを愛する余は、內より溫める力を自覺せずには、生きがひを感ずることの

エレメント　Element　本來の活動範圍。

下蔭　樹木等の下の暗き所。



殘雪　矢延靜外筆

出來ない余は、一年の中この季節に於て、最も自己のエレメントにゐることを感ずるのである。かくて余は、晴れた日はひとり野を行き、丘に登り、春淺い雜木林の下蔭を行きつゝ、頰に冷たい風と背に溫かい日の光を貪り味はふ。書を讀みつゝ夢みるものは旅である。雨に籠つて夢みるものも亦旅である。

余は又早春に當つて特に幼年の時を回想する。土の下に黑くなつて凍つてゐた雪もいつしか解けて溫かい

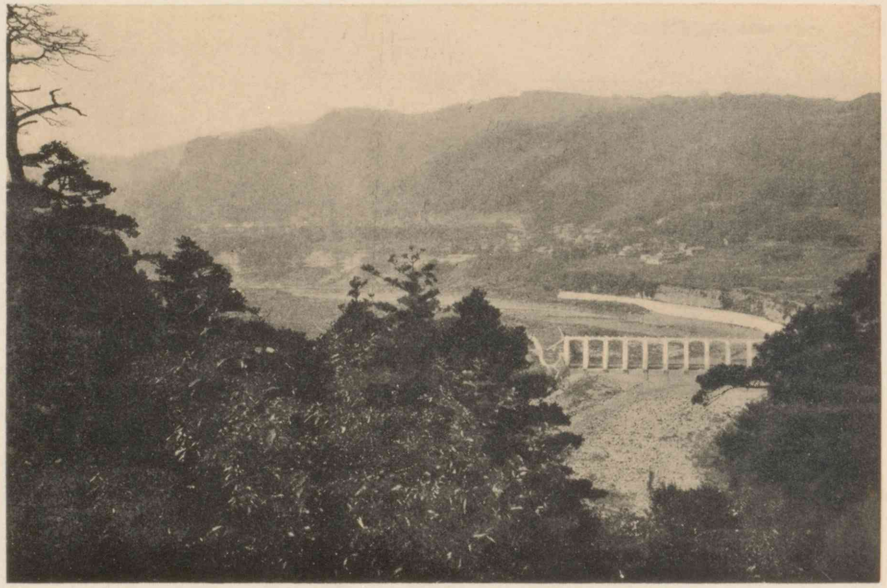
獨樂　コマ。

阿部次郎　哲學者。評論家。東北帝國大學教授。山形縣の人。明治十六年生。

日の光を吸ふ大地の面の、日ごとに廣がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過ぎる雪解けの水の小流をまたいで獨樂を廻した時分のこと、雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、蕗の薹の青い頭を搜しまはる心のときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解けの水の碧く勢よく流れゆく山川の邊に腰をおろして、詩と人生を思つた少年の頃。思へば、これ等の人生の早春も、自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は又余の特愛する第二の季節に――このたびは木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ、羞ぢらひつゝ、すく／＼と伸びゆく晩春初夏の節に――入るのである。

（阿部次郎―北郊雜記）



小諸の古城址

小諸　長野縣北佐久郡小諸町。
遊子

二〇　千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香りも知らず
淺くのみ春はかすみて

麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れゆけば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

（島崎藤村―藤村詩集）

佐久　長野縣の東北部の南北佐久の地。千曲川の盆地。
千曲川　長野縣の東部を流れて、信濃川に注ぐ。

煌々　クワウクワウ。
群陰皆影を伏す
有象無象　ウザウムザウ。天地間のありとあらゆるもの。
皎潔
油然

二　月雪花

煌々たる活動の日の光、西に沈めば玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴なはない清涼の光である。皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦

うちむかふ云々　荷田蒼生子の歌。蒼生子は春滿の姪。歌人。
嗟歎　サタン。
衞星　遊星の周圍を廻りながら、遊星と共に太陽を廻る星をいふ。
古往今來

を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷に浸みわたることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千々の思なりけり。」である。東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちて居る。天文學者はいふ「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である。」と。しかし、この冷たい光が、古往今來どれほどの暖

山家暮雪　山田敬中筆

乾坤を一つにす

花ならば云々　新續古今集、僧仙覺の歌。

三千世界云々　唐の詩人白樂天の句。

廣寒宮　月の世界のことをいふ。

かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山。」といふやうに、眼に入るものゝ悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を懷かしめる。天から落ちてくるこの純白な色に比べては、地上の花も甚しく汚く感じられるの

菊花　横山大觀筆

霏々紛々

瓊玉を敷く

薪炭の料

對照の妙造物の巧

である。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず瞬く間に瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろ／＼な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧をつくしたものではないか。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさま／″＼、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲

棺郭

亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂ひさへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美・華麗・華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ「花をし見ればものおもひもなし。」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

花をし云々　古今集、藤原良房の歌に、「年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見ればものおもひもなし。」とあり。

月雪花三つの眺には各〻その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことはできぬ。

やまざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

やま櫻云々　新古今集、康資王の母の歌。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

これは雪を花に譬へたのである。

冬ながら云々　古今集、清原深養父の歌。

笠は重し呉山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

笠は重し云々　謠曲「葛城」の句。

寸紅

不夜城の觀

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を愛でぬ人もない。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉ざされてゐる極北の國では、氷は卽ち人の家である。この地方の人には、寸紅の目を樂しましめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

世々を云々　伊藤仁齋の歌。

年年云々　唐の劉廷芝が「白頭を悲しむ翁に代りて」の詩句。

月雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興を增す。「世々を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。」月は古來の歴史を照らす鏡である。「年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。」人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

（芳賀矢一—月雪花）

ゆふべやまさりたらむ、村雨なごりなく霽れ、風いと涼しうて、山の端の雲いと白う、わざとならずところ〳〵にかゝれるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむ、匂ひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ、峰の松原こきみどりなるに茜の色燃ゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

（石原正明—年々隨筆）

二三　輕信と妄信

迷信を排す

事理　物事のすぢみち、道理。

心事　心の中で思つてゐる事がら。

心術　心ばへ。

宗教上の迷信なるものは、人皆その排すべきを知つて居る。今日ははたして迷信と稱すべきか疑のあるものすら、猶迷信として斥ける。實に迷信を排する勇氣は乏しくない。併し輕信・妄信の斥くべきものなることは何人も之を知つて居ながら、實際に於ては之に陷ることが決して少くない。事理に考ふれば信用すべからざることも、或人が之を云うたといへば直ちに輕信する。その云うたといふことの中に誤のあることを考へずして妄信する。理窟を以てしては到底信ずべからざることも、屢〻事實の如くに世間に傳はることがある。新聞紙上に現るゝことにして、此の類のものは少くない。人の心事心術の如きは、他より容易に度り得べ

昵近　ヂッキン。したしみ近づく。

忖度　ソンタク。他人の心中をおもひはかること。

利害關係

きことではない。併しながら、恰も鏡にかけてゞも見たかの如くにこれを傳へ、人々は輕信し、妄信する。或人が現に聞いたといふ事柄でも、事理に照らして見て信用すべからざるものは、輕々しく信ずることはできない。況して人の心中にあることに至つては、如何に昵近して居る者でも、正當に忖度することは困難である。

同一の事柄に對しても、人は各〻その視る所を異にする。その視る所は必ずしも誤ではないけれども、注意する點、重きをおく點が異ることがある。我々が現に目撃したといふことにしても、事實の全體を盡すものではない。全く利害關係のないものでもその通りである。若し幾分にても利害の關係、趣味の相異等のある時は、實地見聞したること、必ずしも眞相ではない。これらのことを考へる時には、我々が輕信し妄信するの非なることは明かなるこ

狐疑

常識に訴ふ

澤柳政太郎　文學博士。教育家。昭和二年歿。年六十三。

とである。斯くいふも、人は徒に狐疑して信じないといふことを良しとするのではない。たゞ、輕信妄信を非とするのである。如何にしたならば輕信妄信を免れるか。發達せる常識に訴へて見れば、如何なることは之を信じ、如何なることは之を信ずべからざるか、大體間違ひなきことができると思ふ。又事理に照らして考へて見れば信疑を決すること必ずしも難くはない。

（澤柳政太郎―退耕錄）

人の田を論ずる者訴に負けてねたさに、「その田を刈りてとれ。」とて、人を遣しけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じ給ふ處にあらず。いかにかくは。」といひければ、刈るものども、「その處とても刈るべき理なけれども、僻事せむとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらむ。」とぞいひける。　ことわりいとをかしかりけり。

（吉田兼好―徒然草）

松明

篝火　カガリビ。

廚　クリヤ。

自修文

一　正成教訓

庭にも、邸の外にも、松明の焰が動き、篝火が火の粉をまいてゐた。

二三日來、烈しい暑さつゞきの上に風が少しも無い夜であつたから、早朝に出立すべき準備に忙しい兵等は、裸のまゝで、馬の手入、武器の調べ、兵糧の用意をしてゐた。

馬は鞍を置いて、門前や中庭に、つながれてゐた。矢を束ねて馬に積んだり、野陣の用具を鞍へ抱上げたりして居る者もあつた。

廚の爐は、五つとも、赤々と燃えて、下人と女とが、水を運んだり物を切つたりしてゐた。

部將

獻策

「妻子のある者には、時刻が來るまで、別れを告げにやるがよい。」

正成は、準備が整つたと知らせを受けると、かう云つて、

「生きて戻れぬから、その覺悟をして、始末萬端しておくがよい。」

忙しい出陣の準備と指圖とが終ると、正成は入つて來た部將の坐るのを見て、

「皆、察してをらうが、わしの獻策は、用ひられぬ。この上は、最後の策として、和泉の軍船を、兵庫沖へ廻して、海陸で一戰する外にないが、まう、その暇も無い。恐らく、尊氏は、鞆の邊まで參つてをるであらう。」

誰も、俯いて、默つてゐた。正成に對しては、何も云ふ事が無かつた。自分達の爲に、總ての壓迫・侮辱・不公平を、ぢつと耐へてゐてくれる事が、十分に判つてゐたし、正成の考へてゐる事以上の事が云へなかつたし、それから正成が帝の爲にどんな犧牲にでも成る決心をしてゐるのが判つてゐた。正成が、どんなに自分達の爲に盡してくれたか、勞つてくれたか、又、正成が、どんなにその學んだ書の中の道を踏んで誤るまいとしてゐるか。話に聞く義烈の忠臣の行爲を、そのまゝに行はうとしてゐる正成、又行ひ得る正成、――彼等は正成に對して、いつでも、喜んで死ぬ覺悟をもつてゐた。廊下から侍が、

「御所から、お使が參りまして、左中將殿は、兵庫にて一戰を交へるつもりにて、御陣構へなされましたから、そのお心算にて、急いで御西下下さるやうにと申して參りました。」

正成は、頷いた。侍が去つた。

「兄上、河內へお戻りになつて、まう一度、金剛山で、一合戰遊ばした

左中將殿　左近衞中將のこと。新田義貞をさす。

金剛山　大阪府南河內郡東條村にあり。

正季　正成の弟。延元元年（一九九六）足利尊氏を湊川に防ぎて利あらず、兄と相刺して死す。

親房　北畠親房。

藤房　藤原藤房。吉野朝の忠臣。建武元年（一九九四）後醍醐天皇を諫めて用ひられず、北山に入りて僧となる。

なら……」

「一旦の戰になら、勝てるかも知れん。――然し、わしは、今が、わしの志を天下に示し、後の世の爲に殘しておく、唯一の機會であると思うてゐる。」

正季も人々も、それはよく判つてゐた。判つてはゐたが、正成を討死させたくは無かつた。

「世を見限つたとて、わしは、親房や藤房の如く、遁世するのとはちがふ。强いから、討死しようとするのだ。」

人々は何を正成が云出すのか、全身で聞きながら、

「はい。」

と答へた。

千早　金剛山の西腹。

赤阪　大阪府南河内郡赤坂村字水分に城址あり。

宋學　宋儒の學。主として程頤・朱熹の學をいふ。

「わしは武將として、するだけの事をした。わしが、どれだけ戰へるか、自分の器量を十分に、千早・赤阪・宇治・都で、示す事が出來た。自ら、いさゝか慰め得るものがある。しかし宋學の徒として、どれだけ、道を行ひ得るか。わしが、度々申し聞かせた唐宋の義臣の行は、彼等の十年二十年の命をちゞめたかも知れぬが、その代りに千載萬世、人の鑑として、人の心の中に殘つてをる。不朽にして永世の命を得てをる。これが、道の偉なる所以、德の高大なる所ぢや。わしは、それを今度、行はう

吉野朝の興隆　小山榮達筆

空理空論

大義の原道

と思ふ。お前達にも判つてゐるやうに、公卿中の柱石とも頼む、親房・藤房の兩卿は、隱栖されてしまつた。わしは、御無理は無いと思ふが、宋學に、用ひられずして隱遁するといふ教はない。餘り弱すぎる。公卿としては弱いのも是非も無いが、わしは武將として人間の、宋學の徒の、强さを示してみたい。宋學は空理空論のものではない。いかなる文章と雖も、空理空論では致し方が無いが、殊に宋學の如きは、その實行を尙ぶものだ。そして、わしは公卿の下にゐる――公卿の指圖のまゝに動かなくてはならぬ武將だ。」

正季が、

「兄上はその考が――」

「お前は、公卿を懲らせと申すのであらうが、それはよく判つてゐる。然し、公卿に反對する事は、帝に叛く事で、大義の原道に外れて

覇者　ハシヤ。諸侯の首領。

をる。大義を奉ずる者としては、事の成否を問はず、只、心の直なるまゝに動かなくてはならぬ。便法をとつてはならぬ。もし、便法を取るなら、尊氏と結んで義貞を討つのも一つの方法であらう。そして、武家にわしの力を示し、武家の一勢力を倒しておいて、然る後、徐に尊氏を討つ事も出來ん事ではない。二三の公卿さへ、力强ければ――わしは、それを獻言した事さへあつた。」

「それは、然し、公卿の間に伸びてをる尊氏の勢力が――」

「勿論、宮中は、二分するであらう。然し、千早へ籠つて十分に戰へる。計としてこれ以外には無い。だが、さういふ事は、尊氏の好んで用ひる覇者の道だ。天下を得て、自らを大にせんとする英雄の策だ。わしは武將の家に生れたが、政權も、軍馬の權も、天下も欲しくない。たゞ道を得たい。だから、この度の戰には討死したい。」

十死一生

「何故、討死が道を得る事になりますか」

「道は今生一生の間に、必ずしも、行はれなくともよい。道を行ふ志は千載不滅。わしは十死一生の戰をして死んで、その志を殘したい。わしの志は、天下非常の事あるたびに、人々を振起するであらう。今、わしの心事を知る者は、河内の一族の外にはない。併しわしが、兵庫に於て死ぬ事によつて、幾百年、幾千年、幾千萬人の人に、道の不滅、大義の不朽を、說く事が出來る。わしが志を得ずして、公卿の命のまゝに、愚將の指圖のまゝに、討死をしたといふ事が悲慘であればあるだけ、後世の人心を振り立たせるであらう。わしが金剛山へ戻る事は、わしの討死の機を二三年、或は七八年おくらせもするが、その時になつて今の如く最もいゝ討死の機會――後人をして感激せしめる好機がくるかどうか。わしは兵庫の戰こそ

死處を得

わしの死處を得たるものであると思ふ。わしの手勢は、今五百人しか無い。義貞の二萬の軍に僅か五百人が合して、何の役に立つか。わしが猶戰つて、帝の勢を回復せしめうる見込があれば、公卿を說いて、再び千早へ籠るであらうが、天下の人心は、最早帝をお忘れ申してをる。これを戾すのは、わし一人の力の及ぶ所では無い。よつて、わしはわしの志を後人に待つ。これが、死して、猶志を失はしめない唯一の方法だ。少くも河内の一族は、わしの志を繼ぐであらう。假令、わしを殺すまいとして、援兵は送らぬかもしれぬが、それでよい。その代り、わしが死んだと聞いたなら、正行を守立てて、必死の一戰をしてくれるであらう。わしが生きてをつても死んでも、わしの志は十分に繼いでくれる。滿一、さうであらうが。」

恩智滿一が、

直木三十五　本名は植村宗一。小說家。大阪府の人。明治二十四年生。

「はい。」

と答へた。正成は、滿一の後に俯いてゐる正行へ、

「正行、わかるか。」

と云つた。

「はい。」

と正行が答へた。人々は俯いたまゝであつた。正成が、

「京も見納めだ。酒盛をしてゆつくり今生の別れをしよう。」

と云つた。風は少しも無く、蒸暑い夜であつたが、夜が更けたと見えて人々は著物を掻合せた。

（直木三十五—楠木正成）

楠木正成公

一日生きば一日こゝろを大君の御ために盡す吾が家の風

（橘曙覽）

二　東海道の歌

東海道の旅といへば、昔から一番往來のしげきところ、今日では鐵道の線路となつて、昔日の街道とは多少途中の違ふ所もあるが、旅客は多く、最も一般的なものになつてゐるから、この日本國の大通ともいふべき東海道でよまれた古人の歌に就いて話して見よう。

汽車が東京を離れてから、先づ大きな都會は横濱である。横濱は、維新近くまでは唯の漁村に過ぎなかつた所であるから、勿論古く歌に詠まれる筈はない。しかし、こゝに面白い歌が一つあるから、それを紹介しよう。

日のもとのあづまのみやこを志して使に參りし頃、武藏

の國橫濱の浦といふ所に船の碇をおろして日數經るほどに、おのおの旅のつれづれ慰めむとて、船の上につどひゐて、酒のみ遊びけるに、日も暮れて月のいとおもしろうさし出でたりければ、戲れにその國のしらべをうたふ。　彼　理

むさしの海さし出づる月は天飛ぶやかりほるにやに殘る
影かも

「彼理」といふのはペリーの事である。勿論これは、ペリーの作ではない。幕末の偉人佐久間象山の戲作である。「天とぶや雁」といふ萬葉集の歌に用ひてある枕詞を、そのまゝカリフォルニヤにかけて使つたのは、新味に富んでゐて、この作者の機智の程が窺はれる。

ペリー　Matthew Calbraith Perry　米國の提督。嘉永六年米國の使節として我が國に來りて開國通商を請ひ、安政元年再び來りて和親條約を結べり。(一七九四—一八五八)

箱根を越えてしまへば、視界の焦點は、何うしても東海の靈山たる富士山の上に來なければならない。富士山を詠んだ歌は、萬葉集以來數々あるが、その中で、下から見上げた作には、明治畫壇の巨匠狩野芳崖の作に、

うつくしくあやにたへなりかしこくも神の造れる我がお
ほみ山

といふのがある。さすがに畫家の詠だけに、感じが違つてゐる。笠をかぶつた昔の旅人が、富士の眞下なる松竝木のかげを、富士をかへりみがちにゆく姿は、まさしく廣重の畫である。香川景樹の有名な「木の間〳〵にかへり見て」の歌も思ひ出される。少しすゝむとまう興津である。この邊は、東海道中でも風景絶佳の地であつて、昔から旅人はこゝで心を引きとめられる。

狩野芳崖　畫家。明治二十一年歿。年六十一。

廣重　安藤氏。江戸末期の浮世繪師。安政五年歿。年六十二。(二四五七—二五一八)

木の間〳〵に云云　「富士の嶺を木の間〳〵にかへり見て松の蔭ふむ浮島が原。」とあるによる。

庵原　イホハラ。現今はイハラとよぶ。靜岡縣の一郡。

宇津の山　靜岡縣安倍・志太兩郡の境にある山。宇津谷峠と稱す。

庵原の清見がさきに朝晴れて富士は秋こそ見るべかりけれ　上田秋成

明朗高潔なる富士山が、澄み切つた空に聳えてゐる景は、實に秋がよい。

靜岡を過ぎてやがて宇津の山にかゝる。この峠は、今こそ何分とかゝらずに隧道を拔け終るけれども、昔時にあつては相當に骨の折れる峠であつた。

汽車は遠江にはひつてゐる。このあたりは丘陵がうち續いてのびてゐる。その間をかけ拔けてゆくと、忽ち天龍川である。一走りすると、まう濱名湖である。

旅にして誰にかたらむとほつあふみいなさ細江のはるのあけぼの　香川景樹

引佐　イナサ。

かのわたりを引佐郡といひ、湖岸にいくつもの細い入江があるので、いなさ細江と古くからいはれてをる。この細江は、今では藺の名産地となつてゐる。

名古屋を過ぎて幾程も無く汽車は岐阜に著く。この市の北を流れるのは長良川である。この川は昔から鵜飼に依つて知られてゐる。暗い夜に篝火を焚いて、流に沿うて下つて來る鵜舟の哀趣は、芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」の一句に盡きてゐる。歌では香川景樹に、

雨は止み雲まだ霽れぬ夕やみの空まちいでてさす鵜舟かな

の作がある。

琵琶湖を車窓の右に眺めつゝ行くと、早くも大津に來る。長等

俊成　藤原俊成。歌人。千載集の撰者。元久元年歿。年九十一。(一七七四—一八六四)

平忠度　武將。忠盛の子。壽永三年歿。年四十一。(一八〇四—一八四四)

さざなみや云々　千載集にあり。

山が見える。平家の都落の際、夜にまぎれて五條三位俊成の門をたゝいて、歌稿を託したといふ平忠度の歌は、謡曲の題材ともなつてをる。

さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山ざくらかな

そのかみの街道のさまを思はせる歌に、

雨ふれば泥ふみなづむ大津みちわれに馬ありめさね旅びと　井手曙覧

といふのがある。馬方のいうた詞を其のまゝ歌にしたのである。又、この邊は車をひく牛が多かつたので、それを見て、大隈言道のよんだ面白い歌がある。

初に來て大津の大路けふみればよくも牛には生れざりけり

逢坂山　滋賀縣滋賀郡にあり。

淵叢

汽車は逢坂山を抜けてやがて京都に入る。京都は平安京として文化の淵叢の地であつたから、こゝで詠まれた歌の數は限りもない。しかし京都市中で誰もが第一に京都らしく感じるのは、あの賀茂川の流であらう。

歸るべく夜はふけたれど賀茂川の瀬の音は高く月はさやけし

これも香川景樹の歌であるが、あの柳のゆらぐ岸のほとり、瀬の音の清い河原は、如何にも京らしい感じをそゝる。その川のあたり近く歩みをはこぶと、川瀬の音に旅の疲れも心地よくをさまるであらう。

ルーブル博物館 パリーのセーヌ河右岸にあり。世界に於ける最も完備せる美術博物館。

三 壁畫の盛衰

何れの國に於ても、古代の繪畫の歎賞すべき名作と云ふべきものは、壁畫に多く存するのである。それは東洋でも西洋でも異る事はないのであつて、西洋へ行つて美術を視察する者が、先づ巴里のルーブル博物館あたりに陳列されてある澤山の畫を見ると、近世の油繪の發達の目覺ましきに驚くのであるが、一たび伊太利へ行つて多くの寺院の古い壁畫の雄大なのを見ると、又一層驚歎を禁ぜざるものがあらう。それで我々は、寧ろそれ等の古い壁畫を見て、始めて歐洲の繪畫の淵源する所深きを考へることが出來ると思ふのである。然るに、それは西洋ばかりでなく、東洋に於ても矢張同様であつて、日本の繪畫の發達を考へるに就いても、例へば

法隆寺 奈良縣生駒郡法隆寺村にあり。法相宗の大本山。推古天皇十五年(一二六七)の開創。

閑却

百花妍を競ふ

法隆寺の壁畫の如きものを閑却することはどうしても出來ないのであつて、あの様な畫を作り得た古代の技術を背景としたればこそ、我が近世の繪畫は、百花妍を競ふの美をなしたと云はなければならぬ。

法隆寺の壁畫

所で、西洋は、今も云ふ通り、一度伊太利へ足を蹈込んで見れば、其處だけでも古代の壁畫がどれ程盛んであり、重要なものであつたかは直ぐに判るのであるが、東洋には法隆寺の壁畫の如き甚だ古いものもあるが、概して云ふと古壁畫の遺跡實物を多く見る事が出來ないと云

アジャンター　Ajantā 西印度にある窟院。窟院は二十四個の僧院と五個の佛堂とより成る。その内面の壁畫を以て著明なり。
鳳凰堂　京都府久世郡宇治町にある平等院の本堂をいふ。永承七年（一〇五二）に、藤原頼通創立す。
九品　クホン。極樂淨土往生の九つの等級。
來迎　ライガウ。佛を信ずる者の臨終の際、佛菩薩が來つて極樂淨土に迎へること。

ふ遺憾がある。けれども之を文獻の上から考へるならば、東洋古代の壁畫の隆盛は、寧ろ驚くべきもので、或は西洋のそれ以上であつたかも知れないと思ふ。

支那の古代に於て、壁畫を畫くことの盛んであつた風習は、そのまゝ日本にも移された。我が古代の壁畫の遺迹中、最も古く且著しいものは、何と云つても法隆寺金堂の壁畫に相違ない。是は非常な名畫であつて、今日新疆・甘肅の古寺院に於て發見されたものでも、技術の妙に於て是に及ぶものは恐らくないであらうかと思ふ。それ等新疆・甘肅の壁畫の新しい發見のあつた後に於ても、此の壁畫は印度のアジャンターの畫と相對立して亞細亞の大名物として誇るべきものに相違ない。之に次いで我が遺迹の偉大なるものは、宇治の鳳凰堂の壁畫で、是は九品の來迎を九個處に畫い

繪所　朝廷の繪畫等の事を司る所。
爲成　宅磨爲成。畫工。
室生山　奈良縣宇陀郡室生村にあり。寺號を室生寺といふ。
醍醐寺　眞言宗醍醐派の總本山。京都市伏見區にあり。
法成寺　ホフジヤウジ。京都市の近衞の北、京極の東、現今の寺町より東、荒神口より北に當る地がその舊址。藤原道長の創建にかゝり、治安二年（一〇二二）落成す。平安朝美術の粋はこゝに盡せりといはる。その後屢〻の火災によりて頽廢に歸せり。
輪奐　リンクワン。建物の壯大美麗なること。

たもので、筆者は繪所の長者爲成である。其の他、室生山の金堂の畫、醍醐寺五重塔の畫なども、殘存する平安時代の壁畫として著しいものである。併し、是等の我が國殘存の古壁畫は、法隆寺を除いては餘りに大なるものがない。大きいものゝ殘つてゐないのは殘念であるが、併し記錄に傳へる所を以て攷ふるならば、日本の古代に於て壁畫の盛んであつた事の概要は推測される。

平安朝に於ける寺院の最も名高いものゝ一たる法成寺御堂の如き、その諸堂は何れも輪奐の美を極めて、又佛像の彫刻に於て定朝が畢生の力を罩めた大作を有して、而して加ふるに屋壁・柱等堂内到る處に盛んな畫を畫いたとあつて、その圖は八相成道、九品來迎、或は法華經の畫であつたと云ふのである。それで現に見るかの鳳凰堂の壁畫の如きは、丁度法成寺の畫の一部分を見るやうな

定朝　平安時代の佛工。天喜五年(一七一七)歿。
八相成道　ハッサウジャウダウ。
永福寺　神奈川縣鎌倉郡二階堂村にあり。文治五年(一八四九)落成。
中尊寺　岩手縣西磐井郡平泉村にある天台宗の寺。
毛越寺　モウツジ。同上。
金色堂　コンジキダウ。中尊寺內にあり。

感じのあるもので、それから又鎌倉時代になつてはどうかと云ふと、此の時代の壁畫の遺迹も、今は殘念ながら、その以前の時代のものよりまう一層大きいものが少い。けれどもその當時には亦盛んな壁畫を作つたに相違ないので、賴朝の建てた鎌倉の南の御堂、永福寺などの壁畫には、かなり豪いものゝあつた事を想像し得る。而して賴朝が鎌倉の寺院の裝飾を努むるに至つた動機は、奥州征伐の時親しく中尊寺や毛越寺等を目擊したるに依つて生じたものと書いてある。それから推して考へても、奥州に於けるそれ等寺院の壯麗なりし事が又推察されるので、今見る金色堂などは、當時の一小部分に過ぎないのである。

然るに、支那に於ても、宋朝以來は、壁畫の盛んなものを書くことは段々なくなつて來たので、それと同樣に、日本でも昔のやうな壁

張附畫

畫の製作は中古以來衰へることになつた。日本では足利時代より此方、大きい寺院を作ることはあるが、その內部には往昔のやうな土壁や板壁に壯麗な畫をかくものはあまりない。併しさういふものゝなくなつた代りに、今度は寺院や宮室の內部に紙の張附をして、壁や襖乃至は天井にまで畫をかく事が流行するやうになつた。是は足利時代から行はれ始めて、織田豐臣の時代に於て最も盛んである。織豐時代の張附畫と云ふものは、先づ主として城廓內の書院等に用ふるものであつて、從つてそれ等の畫題と云ふものは、往昔の寺院の壁畫のそれとも異り、又古い平安時代あたりの宮殿內の張附畫のそれとも同一でない。それには人物故事の畫も畫くが、寧ろ盛んに山水畫や花鳥の畫を畫く習であつて、而してそれは往昔の壁畫よりも一層裝飾的である。固より墨畫も畫

極彩色

きはするが、金地に極彩色で畫くと云ふやうな事を盛んにやるのである。織豐時代から殊更盛んになつた是等室内の張附畫は、支那にも見ない性質のもので、それは江戸時代を通じて最近まで我が國に行はれ、是がまた往昔のものとは違ふけれども、一種の壁畫たるには相違ない。但し、此の近世的なる壁畫は、あまり裝飾的なるべく要求された爲に、遂には畫としての資格の上に於て、他の畫、殊に床の間に懸ける畫程に、重きを置かれないやうな傾向をも生じ來つた。その爲に後世は張附畫には却つて無意味なものを多しとするやうになり、畫家に於てもさう云ふものを強ひて畫かなくても、別に立場を作ることは出來るやうに考へるに至つたのである。要するに近世時代に起つた張附畫は、始めの間は十分意味のあつたもので、往昔の壁畫と同一ではないまでも、畫家の大いに

社會の要求

力を用ふべきものとなつてゐたのであるが、だん〳〵移り變つて無意味のものになつたに就いては、事情已むを得ざるものがある。社會の要求が之をして然らしめもしたのである。建築物の上よりの要求も、それをして衰微せしむる原因となつてゐない事はない。

しかのみならず、又近世時代に於て、壁畫が往昔程に盛んでなくなつたのは、何れの國に於ても同じ事である。そこに近世藝術の古代藝術と異る所以のものが認め得られるのであらう。けれども古代に於てあれ程優れたものであつて、今日の人をして驚歎せしむるに足るものであつたのであるから、今日に於てそれを學ぶ者の全くないと云ふ事のあるべき筈はない。事實今日と雖も、壁畫が全然無用な譯ではないのである。西洋では近年になつて、一

たび衰へた壁畫が又復活する傾向を現してゐる。然るに現今の日本の畫家は、どういふものか壁畫とは殆ど沒交渉で、壁畫は自分等には緣のない全く懸離れたものゝ如く考へてゐるやうだ。我我は日本の畫家も、今日大壁畫を善くするだけの力を持つてよささうに思ふので、壁畫に對しては將來新に要求の起る事も恐らくあるのであらうし、又日本畫の過去に鑑みても、壁畫を描く事の工夫が全く無視されると云ふ事は、決して穩當とは思へないのである。

（瀧精一）

春風や三保の松原清見寺　鬼貫

春風や堤長うして家遠し　蕪村

沒交渉　無關係のこと。

瀧精一　文學博士。美術評論家。東京帝國大學教授。東京の人。

主要宛字表

おぼつかなし	覺束なし
かひ	甲斐
きつと	屹度
さすが	流石。
しまふ	仕舞ふ
せつかく	折角
だけ	丈
だめ	駄目
ちやうど	丁度
ちよつと	一寸。鳥度
でたらめ	出鱈目
とかく	兎角。左右
とにかく	兎に角
なか〱	却々
ふるまひ	振舞
はかなし	果敢なし
むだ	無駄
むづかし	六ケし
やたら	矢鱈
やはり	矢張

通用字表

亙（コウ）亘（クワン）	わたる。桓に通ず。
體（タイ）体（ホン）	からだ。笨に同じ。あらし。
但（タン）但（シヨ）	たゞ。「但馬」つたなし。拙劣。
僭（セン）僣（テツ）	身分を越えておごる。僭越。みだりがはし。わるがしこし。

冑(チウ) かぶと。
胄(チウ) よつぎ。嫡子。

協(ケフ) かなふ。叶。
愶(ケフ) おびやかす。脅。

刺(シ・セキ) さす。「名刺」
剌(ラツ) もとる。そむく。

臺(タイ・ダイ) うてな。だい。
台(タイ) 星の名。

後(コウ・ゴ) のち。あと。
后(コウ・ゴ) きみ。「皇后」

商(シヤウ) あきなひ。
啇(テキ) もと、本。

壺(コ) つぼ。
壼(コン) 宮中のみち。

托(タク) 拓に同じ。ひらく。
託(タク) よる、たのむ、ゆだぬ。

擔(タン) になふ。かつぐ。
担(タン・ケツ) はらふ。あぐ。

槍(サウ) やり。
鎗(サウ) 鐘の音。

缺(ケツ) かく。「缺席」
欠(ケン) あくび。「欠伸」

絲(シ) いと。
糸(ベキ) ほそいと、細絲。

羨(セン) うらやむ。
羑(イ) 支那の地名。

郤(ケキ) ひま、隙。
卻(キャク) しりぞく。「退卻」

鍛(タン) きたふ。「鍛錬」
鍜(カ) しころ。錏。

蟲(チュウ) むし。
虫(キ) 魚介類の總稱。まむし。

詫(タ) わび。「詫狀」
詑(タ・イ) 訑に同じ。あざむく。

謟(タウ) うたがふ、疑。
諂(テン) へつらふ。

證(ショウ) あかし。しるし。
証(セイ) いさむ、諫。

豐(ホウ) ゆたか。
豊(レイ) 禮の古字。

迄(キツ) まで。
迠(セフ) ゆく、行。

選(セン) えらぶ。
撰(セン) つくる。

類字表

溢 イツ。あふる。
辯 ベン。—舌。—護。
贏 エイ。かつ。
臆 オク。—病。
己 キ。コ。おのれ。
檢 ケン。—査。
肅 シュク。つゝしむ。
戌 ジュツ。いぬ。
衰 スヰ。よわる。
析 セキ。わかつ。
徵 チョウ。めす。
釣 テウ。つる。
博 ハク。ひろし。
偏 ヘン。ひとへに。かたよる。
喩 ユ。さとす。
綠 リョク。みどり。
祿 ロク。官—。
毆 オウ。—打。

縊 エイ。くびる。
辨 ベン。—當。—天。
羸 ルヰ。よわし。
憶 オク。記—。
已 イ。すでに。
險 ケン。—阻。
蕭 セウ。さびし。
戍 ジュ。まもる。
哀 アイ。あはれ。
柝 タク。ひやうしぎ。
徽 キ。はた。のぼり。
鈞 キン。ひとし。
搏 ハク。うつ。
徧 ヘン。あまねし。
愉 ユ。たのしむ。
緣 エン。ゆかり。
錄 ロク。記—。
歐 オウ。—洲。

隘 アイ。せまし。
辮 ベン。—髮。
瀛 エイ。地名。
億 オク。—兆。
巳 シ。み。
撿 ケン。—校。
簫 セウ。(樂器の名)
戊 ボ。つちのえ。
衷 チウ。まごころ。
折 セツ。をる。
懲 チョウ。こらす。
鈎 コウ。かぎ。つりばり。
摶 タン。セン。にぎる。
遍 ヘン。あまねし。
偸 トウ。ぬすむ。
椽 テン。たるき。
碌 ロク。—青。

謚 エキ。笑ふさま。
瓣 ベン。花—。

緘　カン。　封—。
筋　キン。　すぢ。
羇　キ。　—旅。
祇　ギ。キ。　神—。
款　クワン。　まこと。
遣　ケン。　やる。
卿　ケイ。キヤウ。　—相。公—。
堅　ケン。　かたし。
裁　サイ。　—縫。
炙　シヤ。セキ。　あぶる。したしむ。
鍾　シヨウ。　—馗。
萩　シウ。　はぎ。
飾　シヨク。　裝—。
戎　ジウ。　—衣。
籍　セキ。　書—。戸—。
選　セン。サン。　—擧。
戴　タイ。　いただく。

鍼　シン。　指—。
筯　ジヨ。　箸に同じ。
羈　キ。　—絆。
祗　シ。　—候。
欸　アイ。あゝ。歎聲のさま。
遺　ヰ。　のこす。
鄕　ガウ。キヤウ。　—社。—土。
豎　ジユ。　童子。
栽　サイ。　—培。
灸　キウ。　やいと。
鐘　シヨウ。　—銘。
荻　テキ。　をぎ。
飭　チヨク。　戒—。
戒　カイ。　—具。
藉　シヤ。セキ。　慰—。狼—。
撰　セン。サン。　—著。
載　サイ。　のす。

陶　タウ。　—器。
段　ダン。　—落。
低　テイ。　ひくし。
謄　トウ。　—寫。
杯　ハイ。　さかづき。
廢　ハイ。　—止。
貧　ヒン。　まづし。
敝　ヘイ。　やぶる。
篷　ホウ。　とま。
慢　マン。　—性。
密　ミツ。　—接。
懶　ラン。　おこたる。
剌　ラツ。　潑—。
裏　リ。　うら。
率　リツ。ソツ。　利—。—先。
斂　レン。　をさむ。
嗚　ヲ。　あゝ。—咽。

淘　タウ。　—汰。
叚　カ。　かる。
抵　テイ。　あたる。さはる。
騰　トウ。　沸—。
抔　ホウ。　すくふ。
癈　ハイ。　—兵。
貪　ドン。　むさぼる。
敞　シヤウ。　あきらか。
蓬　ホウ。　よもぎ。
漫　マン。　—言。
蜜　ミツ。　—柑。
癩　ライ。　きらふ。
刺　シ。セキ。　名—。
褁　クワ。　つゝむ。
卒　ソツ。　—倒。
歛　カン。　あたふ。
鳴　メイ。　なく。

文部省檢定濟
昭和八年十二月二十七日　中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日　實業學校國語科用

昭和八年八月一日印刷
昭和八年八月五日發行
昭和八年十一月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行

最新國文讀本（全十冊）
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　湯川松次郎　東京市神田區錦町二丁目七番地
印刷者　井下精一郎　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地

發行所　湯川弘文社　東京市神田區錦町二丁目七番地　大阪市南區順慶町一丁目五十三番地

械科二年

[illegible]直